

ファカルティディベロップメント (FD) 委員会 教員資質向上ワーキンググループ研修会記録報告

アクティブラーニングを促す授業デザイン ～初年次教育と学習支援～

帝京大学 学修・研究支援センター長・教授

主体的学び研究所顧問

土持ゲーリー法一先生講演より

緒言

FD委員会教員資質向上ワーキンググループでは、特に大学教員の資質向上研修の一環として、近年文科省において高等教育に大掛かりな導入が図られている「アクティブラーニング」教授法の共通認識とその実践についての研修を数回開催してきたが、特に本学では実践及び内容的な面で全学的な流れを起し、本学の特徴ある大学教育を充実したものとするために本研修会を開催している。

近年の大学教育改革において、中央教育審議会（中教審）が2012年に公表したいわゆる「質的答申」の内容「知識の伝達・注入教育から能動的学習 [アクティブ・ラーニング] への転換表明」から5年以上が経過しようとするが、特に中規模以下の大学においては、この学内教育改革は遅々として進行していないのが現状である。その原因としては、2つの不足、つまり「この専門分野における教員不足」、および「教員の認識不足」が挙げられる。

特に「教員の認識不足」の原因として「教育の質的転換」は「教員の質的転換」を伴うことを認識していないことに由来する。

転換を求められている大学教育に関し、ただでさえ充分な「大学教授法」を教授されていないまま教壇に立つ我々「大学教員」は、近年自身が受けてきた従来の大学教授法が成立しないことを認識したときに、当然戸惑う。その原点には本稿に述べられている「学習パラダイム転換」が内在する。それは若手教員であろうが年配教員であろうが、学生にとっては「教育内容よりも教授法内容」によって理解内容を微妙に感じ取っているからである。

本冊子の内容は、「アクティブラーニング」に関するワークショップの「現場中継」である。もちろん、「現場中継」は「現場中継」以上のことは伝えられないのであるが、このワークショップがあまりにも「アクティブラーニング」の初歩から現状までに沿ったわかりやすいアクティブな内容であるので、「現場からお伝えします」といった内容に徹している。

もちろん編集段階ではゲーリー先生監修をいただいているので、先生方には本稿を読んでいただき教授法の一助としていただき、少しでも良い授業、良い講義、が学生に届けば幸いである。

ファカルティディベロップメント委員会 教員資質向上ワーキンググループ 主査
大学院医療科学研究科 医学教育センター 医療科学部
教授 渡邊 利明

目 次

- 1) はじめに…FD委員長 副学長 教育人間科学
部長 教授 永沼 充
- 2) 講演者紹介…FD委員会 WG主査 医学教育
センター教授 渡邊 利明
- 3) 講演者挨拶…帝京大学学修・研究支援センター
センター長 教授 土持ゲーリー法一
- 4) ICE Breaker…事前課題：反転授業の体験学習
- 5) ミニ研修…視聴確認試験：反転授業とチーム
ベース型学習 (TBL)
＜1＞RAT (準備確認試験) 実施
＜2＞RAT (準備確認試験) によるアクティブ
ラーニング
- 6) 本日の話題
＜1＞アクティブラーニングがなぜ必要なのか。
① 現在の大学教育体制
② 今の大学教育では学生は変えられない
③ 最も退屈な授業
＜2＞学習パラダイムって何なの？

- ④ パラダイム学習転換
- ⑤ 学習パラダイムとICT
- ⑥ 学習パラダイムの現状と課題
- ⑦ アクティブラーニングの全体像
- ＜3＞アクティブラーニングと教室外授業との関係
- ⑧ アクティブ・ラーニングからアクティブ
ラーニングへ
- ⑨ アクティブラーニングはこれで良い？
- ⑩ 1週間の授業 (教室) 外学習時間は？
- ⑪ 実験の失敗
- ＜4＞アクティブラーニングを促す授業デザイン
- ⑫ アクティブラーニングのシラバス？
- ⑬ 熟慮を重ねる
- ⑭ プループリントとシラバス
- ⑮ 評価とアセスメント
- ⑯ 氷山の一角
- ＜5＞初年次教育と学習支援
- ⑰ とにかく初年次がキモ
- ⑱ 専門教育とアクティブラーニング

⑲ 反転授業とフィードバック：事例を踏まえて

⑳ ICT授業デザイン

7) 質問コーナー

〈1〉ティーチングパラダイムとラーニングパラダイムのバランスについて

〈2〉レフレクションノートについて

1) はじめに

(司会者 渡邊：ではFD委員会委員長の永沼先生からお言葉をいただきます。)

永沼です。今日は土持先生にいらしていただいているのですが、本学のFDというのはじつは昔からやっていましたが、あんまりなかなか離陸しきれていないという風に思っております。

学長先生の紹介で以前土持先生を紹介していただきまして、先ほど先生とお話していたら、土持先生にもう何回か来ていただいていると思っていたんですけども、今日は2回目らしいんですね。土持先生は後で細かい紹介があるかと思いますが、日米で教育学を修めておられまして、最初の本学講演時に2月か3月に来ていただけたというので期待しておりましたら、飛行機に乗れないということで(大雪で)、その時私の記憶ですとアメリカの東部が大雪になってそれで2、3日も交通機関が麻痺して先生はそちらにおられていたので、行きたいのだけれども帰国できないというお話がございました。それからしばらくして来ていただきましたよね。その時に目から鱗といいますか、ああこういうお話が聞けるのだというのがありまして、それで是非本学でももう一度前回の続きのようなところで、先生にお話をいただきたいという風に思っております。

今日は、FD委員会の特別クラスということで選定させていただきましたので、前回同様グループ作業があって、皆さん学生になった気分ですらざるを得ないところがあります。私も実はちょっと若干ストレスがかかっているんですけども。なんとかこなしていきたいと思います。

では皆さん宜しくお願いいたします。(拍手)

2) 講演者紹介

(司会者 渡邊)

永沼先生ありがとうございます。遅れましたけれども、私、今回司会を務めさせていただきます医学教育センターの渡邊と申します。宜しくお願い致します。

それでは、続きましてゲーリー先生の人となりを

ご紹介させていただきます。

今日おいでになっておられますゲーリー先生の肩書は帝京大学学修・研究支援センター長、このなかの学修の修は修めると書きます。普通のスタディ(つまり習うほうの学習)ではないことをご承知おきください。

それから、本日の演題としては、「アクティブラーニングを促す授業デザイン 初年次教育と教養教育」であります。

それでは、先生のご紹介を簡単にさせていただきます。経歴としては1980年コロンビア大学大学院で教育学Ph.D.をお取りになりました。1980年6月で東大の医学博士の学位も取られておられます。それから弘前大学を経て1990年から帝京大学の高等教育開発センター長・教授、先ほど申しました帝京大学学修・研修支援センター長教授ということで、著書、論文多数でございます。特にアクティブラーニングに伴います主体性に繋げる評価と学習方法ということを専門にされて研究されておられます。

本日は、先生が愛するICEモデルを主体としたアクティブランゲージについてお話いただきたいと思います。では、先生宜しくお願い致します。

3) 講演者挨拶

はい、皆さんこんにちは。(受講者一同：こんにちは。)

只今ご紹介に預かりました帝京大学八王子キャンパスにあります、学修・研究支援センターの土持です。今回が2回目ということで、なんかもう何回も来たようなそういう雰囲気なのですけども。渡邊先生のご紹介の中で1点だけ訂正させていただきたいと思いますが、私は東京大学では教育学であって医学ではないので。私が医学でしたら看護系の先生が是非うちに来てくださいということになるかと思いますが、私はコロンビアの方も教育学、東大の方も両方教育学の博士号ということですので、修正させていただきます。

今日はですね、長時間にわたって5時までです。これは、すごいですな。なかなかこれだけの時間は皆さん方が集中できるかどうかというのもう私の腕の見せ所かもしれませんけれども、ファシリテータとしてはなかなか大変かな、と思います。けれどもとにかくやりがいはあります。

私のFDというのは、帝京大学のとき、私が弘前大学から移ってすぐ、今から8年くらい前からFD

はフードアンドドリンクでワークショップを行っていました。とにかくこの今日くらいの長さのワークショップだと疲れますから、1日に2回くらいしか入れなくて、ブレイクを入れながら、こう例えば30分、1時間学んだことを10分くらいの休憩の中でどうだった？わかった？何が分からなかったと探りながら、和気藹々とやるんです。またこういうブレイクのワンクッションがあるとすごく良いワークショップになります。

そうすると、みんな先生方がワークショップによく来るんですよ。そしてその中では授業公開もするし、お互いの先生方の情報交換もするし、シラバスの交換もするし、目に見えない副産物的なものがいっぱいあるんですよね。こういうのが、FDセンターというのかな、そういう高等教育開発センター、学修・研究支援センターがそういうのを作りました。

また、そういうのを率先してやるのがセンター長の仕事ですよ。私の仕事は他に何もありません。そういうネゴシエーション、そういう予算を取ってくる、そういうアイデアをやるのが私であって、後は他の先生方が全部やってくださる。そういう雑談になりましたけれども、まだ誰もこないから、どうしましょうかね。そろそろ本題をやりましょうかね。

4) ICE Breaker…事前課題：反転授業の体験学習

事前課題：反転授業の体験学習

1) 視聴した映像

・ディー・フィンク博士と土持ゲーリー法一との対談「教育と学習に関する主体的学びについて」（字幕付き）

2) 事前準備学習

・「チャプター4：アクティブ・ラーニングについて」
・「チャプター8：省察的アクティブラーニングについて」

3) 事前確認試験

そのパワーポイントとは別に、皆さん方には事前学習というのをやって来て貰っているはずですね。頭を押さえている先生もいらっしゃいますけれども、一応これをやることなので。これは事前課題ですけれども、これは所謂、皆さん方がよく巷で聞く反転授業と言うことです。反転授業と言うのは教室でやるハイライトを教室の外（自宅）に出して、事前に学生にちょっとかじってきてもらう。（事前学習：予習の大きい）いいですか。

で、この反転授業、皆さん方授業で反転授業を

作ってらっしゃる先生いらっしゃいます？そんな余裕はない？実はみんな余裕ないんです。まあ、みんなそう時間ない。余裕ない。もう私も、この反転授業は一つだけでいいんですよ。1クラス。自分の好きなクラス1つ作ってください。全部作ったらもう、本当、自分が反転してしまってどこに行っちゃかわかんなくなるんで…。（一同：笑い）

1つでいいんです。とにかく反転授業というのはどういうものかって味わうために自分が一番好きな授業、自分が一番好きなクラスで手応えのある授業、これでちょっとやってみてください。そういうのが反転授業です。反転授業が余り重たくなりすぎると学生が消化不良を起こすのでやらない。学生も大変です。

反転授業の一番いい作り方：

反転授業の一番いい作り方は、授業内容の入った「良い予告編」を作るんです。

皆さん方、映画の予告編を見て「映画を見たくない」と言うのと、これはもう予告編大失敗ですよ。いいところを摘み食いしているわけだから。だから反転授業と言うのは、そういうものです。「授業に出てきたらこういう風に楽しいことがあるよ」というのを5分くらいでまとめるんです。そしてそれをLMS（Learning Management System：学習管理運営システム）かどこかにアップして、そしてそれを学生に見てきてもらう。そういうことによって学生は何か、勿論覚えてはきてはいないけれども少なくともウォームアップはしているんですね。授業に行こうと思う人だけがそのクリップしてね、授業を行う予告の映像を見るわけですから。もうそれだけでも成功ですよ。

じつは、「学生が映像を見ようと思うその気持ち」がもうすごく大事」だと思いませんか。ですから、そういうための経験を皆さん方に知ってもらうためにこの事前学習というのをやってもらいました。これをこれから皆さん方にやってもらいます。

Icebreaker 砕氷船



アイスブレイカーですね。もう、今日は冬ですけどアイスブレイカーというと、なんかアイスが欲しいよな。…違うんです、日本ではどういうかと言うと導入編。導入編がとても大事なんです。「このスライドでなんか始まりそうだな」学生がそう思ったらこっちのもの。

こういうことをやろうということで今日皆さん方に「こういうものを視聴してきてください」と言って、お送りしました。

たくさんのチャプターがある中で、今日の講演に関係があるのはチャプター4 アクティブラーニングについて、チャプター8 これは看護系の先生方を意識しまして「省察的振り返り」のアクティブラーニング、この2つは長いビデオではなかったはずですよ。これを見てきてください。こういうのを学生にやってもね、「見ました」と言うんです。殆ど見なかったと言う学生は0（ゼロ）ですよ。みんな見たと言うんです。帝京八王子の学生、1年生の学生ですから、「見たか?」「はい」と言うんです。

見たか、見ないかと言うのは、私はわからない。ところが皆さん、分かるんですね。最近に進んでいるんですよ。LMSがあったら、どの学生が何分視聴したかと言う記録が出るんです。私はそれを後になってそれに気づいたんです。うちの教務グループの職員に、そこの学生の視聴履歴をプリントさせたわけです。実は学生、LMSにそういうツールがあることも知らない。それを私は密かに持って教室に行って同じことを質問したんです。「君たちビデオ見てきたか」「はい」というんです。「はい。見た」というんですね。25分間のビデオをちゃんと見たというんです。私は頭にきてね、「これが見えないか」水戸黄門ですよ。「これが見えないか。君たちの学生の中には名前は取って言わないよ。28秒で切っている学生がこれを、ビデオを見た。そんなことが言えるかね」学生の方がびっくりした。「なんでそれが分かるんだっていうんだ」「パッと見せたんですよ。視聴履歴を」それからしっかり見るようになったんですよ。

これはもう効果てき面ですよ。ただ問題は、そこで喜んではいけないんです。スイッチを押して他のことをやっているかもしれない。わかりますか？これは今の学生だから。視聴時間が長いから、じゃあ、ちゃんと視聴したか、それは甘い考えです。そこで甘い考えをなくすためにどうするか。試験をするんです。

これは試験じゃないですね。クイズ。正しく視聴

したかどうかと言うクイズ。今日これから皆さん方にもやるんですよ。見ました。どのくらい見たかわからない。正しく見たか、分からないかどうか、これから問われるんです。これを反転授業といいます。

授業でこれを使ったら、学生は「ワクワク、ドキドキ」で非常に喜びます。この反転授業がより効果的であるためにはチーム（グループ）で行動するんですが、これからこのチームの鋭さ、効果を先生方に話します。この視聴確認テストは、個人で最初やってもらいます。

しかし、個人でやってもらおうと効果がないんです。なぜでしょう。個人でやってもらおうと大抵満点を取るんです。ところがグループでやると、絶対満点は取れないんです。なぜか。そう言うグループ構成になっているんです。足を引っ張るのを入れているんですよ、グループ内に。

これがポイントです。必ずチームに足を引っ張る異分子をたくさん入れなければいけない。たくさん意見があるとグループが1つにならないから。一人ぐらい「えーそれ違うんじゃない?」と言うんです。足を引っ張ると、個人では満点だけど、グループでは満点は出ない。ところが実は、この視聴確認テストは満点としてはダメです。

満点とったらどうなるか。ゲーリー先生がクビになるんですよ。満点取らない試験をしなければならぬ。だから今日皆さんが満点とったら帰りますから、絶対満点取らないで。満点を取らない、逆にそういう試験問題を作らなければいけないんです。私が毎週これをやっているんです。水曜日の大好きな1クラスの授業のみ。

5) ミニ研修・・・視聴確認試験：反転授業とチームベース型学習（TBL）

ミニ研修：視聴確認試験

- 1) これから「フリット・クラスルーム（反転授業）のミニ研修」を行います。
- 2) フリット・クラスルーム（反転授業）は、チームベース型学習（TBL）で行うことで、より効果的にアクティブラーニングを促すことができます。
- 3) これから、事前課題の視聴が正しく理解できているかどうかの「準備確認試験（Readiness Assurance Test, RAT）」を行います。
- 4) 試験問題は事前課題の中から5問を用意しました。最初に、個人で解答してもらい、次に、各グループで議論しながら、グループとしての正解を決めます。ただし、正解は一つとは限りません。
- 5) グループのスコア採点をお願いします。採点方法は後で説明します。

帝京科学大学 10講義会（2018年11月）

この視聴確認テストと言うのは「正解を問うのではなくて、議論を問う」のです。ここで、正解でないから、アクティブラーニングに繋がるのです。なぜ私の、悪いの？どうして間違っているの？ということなのです。

事前学習に関するクイズ、これ4択で25問ですけども、50問とか色々な種類があって、スクラッチクイズをやる。これが準備確認テスト、RATと言うんですけど、これがそうです。ここに問い合わせたらもうこれを一度買ったなら5、6年大丈夫なくらい、たくさんスクラッチありますから。今日はその中から時間もありますし5問試験問題を用意しました。これから皆さん方、誰かちょっと時間を計っておいてください。

<1>RAT（準備確認試験）実施

3分間。誰かちょっと計っておいてください。（司会者 渡邊：計ります！）3分間時間を計りますから。まず個人で答えてください。ボールペンで書いてください。鉛筆はだめ。後で人の答えを見て消すから。「ボールペンで！！」（一同：笑い）

もう八王子の学生に対応していると先生も賢くなりますからね。3分計って行きます。

皆さん、答えが1つあるというのは慣れていますけど、「答えが一つとは限らない」ということを学生にもこの機会にね、ただ、自分の答えが絶対に正しいんだということをね、エビデンスを持って、こう相手（グループ内およびグループ外）を納得させる、これが大事。

（司会者 渡邊：腕をクロスし「UP！」）

はい。もう、時間になりました。やめてください。それではですね、それぞれのテーブルにスクラッチクイズがあります。取ってください。コインを出してください。どのコインでも結構です。大きな声を出して議論して、最終的にはグループの判断で削ってください。

準備確認試験解答用紙

The image shows two versions of the RAT (Immediate Feedback Assessment Technique) answer sheet. The left version is a blank template with columns for questions 1-8, options A, B, C, D, and a score column. The right version shows the same template with handwritten answers and scores. An arrow points from the blank template to the filled-in version.

いいですか。こういうものですね。こう、出ていますね。で、削って正解が出ますと、ここに星が出ます。星が出た？星が出たら正解。星が出るまで削ります。曇っていても、ちゃんと星は出ます。スコアです。1回で当たった人、ジャックポットですが、1回で当たった人は4点あげます。いいですか。1回でダメだったら、隣を削って2回。2回で当たった人は、2点。3回で当たった人は、1点。4択ですからね、4回で当たった人は、ゲンコツです。で、「はい、はじめ」という風に学生に言っているわけです。そういうことを含ませながら、点数も入れて貰いますので。どうぞ。グループでやってください。削らない限りは、答えはわかりません。私もわからない。

「話して、討論して、そして、お互いに足を引っ張る」（一同：笑い）

大きな声を出して、足を引っ張って。（各グループ討議中。）

百点取る。百点取ったら、私は帰る。

（司会者 渡邊：削るのは後でもいいですよ。）

今削って。あの全部削ってください。順番に削ってください。

（司会者 渡邊：結論を出してからでもいいんですよ。）

そうそう。グループで結論を出してよ。

（参加者が色々と話している。）

一問ずつグループで話し合っ削っていきます。まあね、最初は楽勝なんだよね。

（司会者 渡邊：1回目で2つ削ってもいいですか？）

1回で2つ削ったら、2点にしかありませんよね。

（司会者 渡邊：そうですね。）

当たった人はね、本当に横にスターがないんだろうかと横を削ったら失格ですからね。

（各グループ討議中。）

楽しいね、たくさん削れて。そういうことは楽しまなければだめよ。「同じ授業代払っているんだから、楽しまなければダメよ」って学生には言います。みんな苦勞しているな。時々、横の方にあるから気をつけて。真ん中じゃなくて。今のところ、私は帰らなくて済みそうだ。（一同：笑い）

済んだところはね、右端の方にスコアを書くとところがありますから、スコアを書いてください。20点が満点ですよ。20点満点で何点を取ったかということを、マイクを通してグループごとに発表し

ます。後1分ということでお願いします。

(司会者 渡邊：先生、足を引っ張らないでくださいよ。そんなに。)

はい、出来上がったところは合計点を出してください。みんなの前で発表して貰います。

(司会者 渡邊：10、10、11点…このグループ終わりました。)

<RAT (準備確認試験) 解説>

終わった？もう1分たちましたね。じゃあはい。もう無駄な抵抗は止めてください。

と言うことで、まあ殆ど満点はなさそうな雰囲気ですけれども、20点満点で何点だったかと言うことだけ聞きましょう。

Aグループ、ここは何点ですか。(11点です。)
11点。うん、11点。

Bグループ、ここは？11点？一緒だね。話しあったな。(一同：笑い)

Cグループ、ここは何点？(11点です。)

A、B、Cグループ、11点、11点、11点。3つ11点。

Dグループ、ここは？(教員：意見が纏まりませんでした) 意見が纏まらなかった？(笑い声、なぜ？) Dグループは時間切れということ？こういうグループもあるということですか。

大事なことは、先ほど言いましたように**正解**することがポイントじゃないんです。間違ったところ、ここみたいに結論が出にくいグループが実はゲーリー先生は大好きなんです。(一同：笑い)

そういうことなんですよ。何か真剣に物事を考えたらね。そう簡単にね、白黒つけられないでしょ。(笑い声と納得の声)

と言うことですよ。質問の時間ですよ。皆さん方の問題でどの問題が一番揉めました？最後？(司会者 渡邊：4番と5番ですね。)

<2> RAT (準備確認試験) によるアクティブラーニング

(1) <正解は1つ、しかし2つの選択肢が適切と考えられる設問を用意した際のアクティブラーニングを行うパターン>

問4が一番揉めた。はい、問4が揉めたということで、これからゲーリー先生が問4の講義を行います。問4は「省察振り返りについてフィンク博士が最も重視しているのは、どれだと思いますか」ですよ。これね。だから、私がそう聞いているんだか

ら、答えはバレますよね。「どうですかって聞いているんです」はい。個人のところをいま聞きます。個人でAとした人いる？Aはいなかった？それではBとした人は？あのBとした人はいます？いますね。Cは？

Aが正解、Bは不正解だけど、Bが多かったわけだ。OK。では、Bについて討論しましょう。それでは聞きます。なんでBは悪いの？

(受講者：選択肢に書かれている「新しい」とは思われないんです。)

おー、いい事言いますね。特に新しいとは思わなかった。で、ただビデオでは「新しいアプローチだ」という言葉は使っているんですよ。そこにみんな引っ掛かっているんだけど、「手法として実際は新しくないんじゃないの」そういう意見ね。いいですね。

でも、フィンク先生はこのBの選択肢にある「教科を振り返る事」っていうのははっきりと言っているんですよ。「新しいアプローチ」という事も言っているんですよ。だからA、B両方正しいんですよ。

ね、両方正しいにも拘わらず、なんでAが正解なのか。それは正解を1つ決めなければいけないからですよ。両方正しいですよ。両方正しいのだけれども、やはり「新しいアプローチ」という言い方からすると…。フィンク先生は多分この辺りを強調しているんです。

ところがこれに対して、Bを選んだ人は「絶対そうじゃないと、新しいアプローチなんてそんなファジーない方はよくわからない」これは「新しいアプローチではない」とさっき反応したからね、しっかりと「教科を…」という事を言っているじゃないですか。「教科の方がもっと説得力がある、エビデンスがある」と、こういうわけですよ。で、これ問題ですね。どうするのか。正解を2つにするのか？

正解は2つにできないんです。スクラッチクイズは答えが1つしかないんです。

で、どうするのか。もう一回やり直すか、これはもっと大変な事になる。これは変えることはできない。

そこで、「どう言う風にフィン先生が言っているか」と問う、ここが大事ですね。要するにスクラッチクイズ上はAが正解です。本来はAの人しか点はないんです。

ところが、皆さん方や学生が「いや、絶対Aと思わない、私はBだと思う」Bだという証拠、エビデンスを添えて先生を説得できてもこの人は正解で

はないのです。だって、正解は1つだから。しかしながら、その人は加点を貰うんです。

わかります？加点がいま大学で求められている事です。正解ではないんです。正解は偶然もあるわけですよ。だって4択のクイズなんてね、時々間違っただったこともあるわけですよ。でも加点はそうはいかない。だって自分が説得しなければいけない。例えば、「フィンク先生のビデオのこんなところでこの教科を振り返るということを言っていたではないですか」ってエビデンスを示す。

全体の流れから見て「教科…振り返る」方が私は、いいと思う。私と言うよりグループがそう思っていて、そしてそれを持って研究室に行くわけですよ。

研究室で先生と議論して、やっつける。そうすると先生が「なかなか立派じゃない」となる。元々先生は、答えを2つ置いているんだから、だからそう言うことですよ。だから私もちゃんと、皆さんは1、2、3番は当たると思っているんです。4、5番は当たらないと思っているんです。だから4番のところは答えは2つ入れているんです。

答えが2つあるということで、ここからアクティブラーニングに持っていくんです。「なぜ、あなたはBだと思うんですか。みんなに説得できますか」ということを議論していくわけ。ここは答えがAかBしかないから、C、Dの人が出てきてもらっては困るわけですよ。「ちょっと貴方黙ってください」って感じで進める。（一同：笑い）

(2) <全て正解の問題でアクティブラーニングを行うパターン>

これから5番をやります。5番正解の人、個人でいました？5番の正解何？

（司会者 渡邊：Cです。）

Cですね、はい。5番はCです。Cとした人、何人います？

皆さん手を挙げてみて。Aだと思った人、手を挙げて。Aいますね。Bだと思った人は？Dは？ということ、答えはみんな分かれたんですね。

Cは答えだったんだね。これ、皆さん方、5番の問題は、トリッキーです。みんな正解です。（一同笑い、「はー」と言う納得の声。）みんな正解です。この中から1つ選ばなければいけない。これ、人生ですよ。

絶対1つ選ばなきゃ。選んだ時に、なぜ私はCを選んだのか。Cが好きだからじゃないですよ。なぜCなのか。人に説明できなければいけないんです。

で、ここはA、B、C、D全部正解だから、どれを持ってきても、もし上手に相手にね、説明できたら加点がもらえる。

これがこのゲームの面白いところです。皆さん方、楽しんだでしょ。これ学生にやらせてごらん。めっちゃくちゃ楽しめます。だから、私は毎週やっているんです。もう学生はね、スクラッチクイズやるともう凄く楽しいですよ。

で、今回はちょっと時間が長めでやっていますけれども、5分くらいでいいですよ。で、ここから導入編で、これ全部、授業で大切なビデオを見てきたことをここからやっていくわけですよ。そのままだがスーッと授業に繋がっていくわけですよ。

前置きが長くなりましたが、今日は皆さん方にね、こういうことを勉強してもらいたい。FD委員会の先生ですから。この辺りしっかりと。

本日の話題

- 1) なぜ、アクティブラーニングが必要なのか。
- 2) 「学習パラダイム」とは何か。
- 3) アクティブラーニングと教室外学習
- 4) アクティブラーニングを促す授業デザインとは、どのようなものか。
- 5) 初年次教育と学習支援の関係。
- 6) 教室外学習時間～単位制の形骸化

- 1) アクティブラーニングがなぜ必要なのか。
- 2) 学習パラダイムって何なの？
- 3) アクティブラーニングと教室外学習との関係はどうなの？

日本では、アクティブラーニングっていうのは教室外学習と捉えているんです。アクティブラーニングは教室外学習、教室内学習はアクティブラーニングではない！アクティブラーニングは教室外との関係が非常にあるってことだね。

で、今日のメインのテーマであります。

- 4) アクティブラーニングを促す授業デザインってどうするの？

これ、後でも本論でも話しますが、シラバスに書けばいいじゃないか。シラバスに書いて学生が覚えてきます？ね、そんな楽勝だったらみんな大学の先生になりますよ。「やだなー？」アクティブラーニングを学生に促すために何が必要か。シラバスよりもっとその前の学習。「授業デザインをどうするか」ということですね。

5) 初年次教育と学習支援

初年度教育は「教養教育」というふうに言われているように、曖昧でわからない学習支援、教養教育でもいいんですけども、やはり問題なのは、「初年次教育と学習支援の関係」。

最後に、

6) 教室外学習時間、単位制の形骸化を話します。

<1>アクティブラーニングがなぜ必要なのか

① 現在の大学教育体制

教育体制っていうのは実は私の研究テーマです。私は戦後の大学史を研究しておりまして、新制大学の成立をずっと追いかけているんですけども、新制大学という教育制度の由縁は2つあるんです。それは、1つは一般教育、もう1つは単位制です。一般教育も単位制も戦前はなかったんです。戦前は一般教育に代わって旧制高校っていうのがあって教養教育っていうのがあったのです。でも個々の教養教育は専門、つまり旧制大学に行くための準備だったわけですから一般教育とは基本的に違うのですよ。

ところが新制大学になると基本的に違ってないんですね。皆さん方の大学はどうかわかりませんが、いま、日本の大学において大学教育は、もう全部前倒しでしょ。ね、教養教育は専門教育の予備教育みたいなものでしょ。そしたら、旧制高校と一緒にじゃないですか。

教養教育が新制大学に入った時にGHQ、アメリカの占領軍ですね。占領軍が最も嫌ったのは、旧制高校と旧制大学が別々の高等教育機関だという、これをものすごく嫌がったんです。これを一緒にしたのが新制大学だったんです。それを絶対一緒にさせないとしたのが日本ですよ、戦後の。だから根底からズレていたんです。

GHQはアメリカ並みに人種の坩堝で、「全ては一緒に良い」ってことですね。トランプがいま民主党に協力を仰いでいるけど、もうあれだけ喧嘩していても一緒にになりたいわけです。一緒ということがアメリカの民主主義の根幹です。

だから旧制高校と旧制大学が別々の高等教育機関として長い間、日本のエリートに君臨していたわけですよ。これが許せなかった。徹底的に嫌ったのがGHQなんですよ。GHQは新制大学を作って一般教育（教養教育）と専門教育を別々にしたんですよ。

わかります？ところが現在は別々になっていないね、確かにね。一時期は別々、一般教育1、2年。

3、4年専門教育でした。いまそんな崩れていて“ない”。実は一般教育と専門教育の時からもう崩れてないがしろにされていたんですよ。

だけど、日本人は元々戦前からずっと旧制高校と旧制大学は別のものであるという認識が心の中どこかにあるんです。だから新しい大学になっても専門の前倒しがおこなわれているんです。大学は専門教育だから、一般教育は専門のためだと思っているんです。

これが日本のこれから壁にブチ当たる問題です。実は専門教育・専門内容を徹底的に否定するのが一般教育の役割です。専門の言うなりになっていたら、どうなるわけ？専門学校と一緒にじゃない。でも、1年生だけはほとんど自由な一般教育ができる。1年生が大事です。この話、私は学生にいつも言っているの。

② いまの大学教育では学生は変えられない

「いまの大学教育では学生は変えられない」

1) 最近、京都大学を退職された溝上慎一教授が『大学生白書2018 いまの大学教育では学生は変えられない』（東信堂、2018年）というショッキングな著書を刊行され、その記者会見が2018年9月25日に日本記者クラブで行われた。これは過去20年間のデータにもとづく発表で説得力があった。詳細は、<https://www.youtube.com/watch?v=ms6QmahtBS0&feature=youtu.be>を参照。本日は、これも参考にしながら、話をする。
2) なぜ、アクティブラーニングが必要なのかを、次頁の動画で見ることにする。これは前回の研修でも紹介した。

なので、私は1年生しか教えたことがない。私は日本に来て20年近く1年生しか教えたことがないんです。私は1年生に全てを賭けている。もう2年生以上は諦めているんです。1年生の時ダメだと、どんなに騒いでもダメ。いまはもう、もっと凄いですよ。

私はもう、ずーっと弘前大学の時から1年生に特化し、1年生の授業しか教えたことがない。2年生の講義依頼が来て、教職課程を持ってくださいと一時期ありましたが、大学教育は1年生のとき1年間で叩けなければダメです。

だから、今日の初年次教育というのは私にとっては素晴らしいと思うんです。初年次に叩けなかったら、もうこれは如何しようもないんですね。本当に如何しようもない。という風に私はずっといままで言ってきたんです。ところが、後ほど紹介しますが、京都大学の教授がですね、20何年間京都大学に居て、京都大学を辞めて高校に移ったんですよ。

凄いことですよ。で、「日本の大学ではダメだ」と言っているわけですよ。機能しない。じゃあ、何が機能するか。「高校2年生が機能する」と言っているわけですよ。私1年生が機能すると思ったんですけども、もっと上が居るんですね。1年生でもダメだって言っているんですよ。「高校からしっかりと教養教育的なものをやらないとダメ」と、こういう発想です。

ですから、彼は「今の大学教育では学生は変えられない」と言っているんです。凄いこと言いますね。これ、私が言っていたら袋だたきです。みなさん。（一同：笑い）わかりますか。私が言ったらもう殺されちゃいますね。もうないですよ。（再度一同：笑い）

ところがこの京都大学の教授、まだ50歳そこそこですよ。アクティブラーニングのいま、日本の第一人者ですよ。どれだけたくさん本を書いているか。その先生が大学生白書2018年、「今の大学教授は学生を変えられない」という9月25日に日本記者クラブで記者会見をやって、「YouTube見てください」全部ここに入っていますから。

嘘じゃないんです。もう如何しようもないと諦めているんです。文科省も役に立たないって言っているわけですよ。凄いこと言いますよね。私も実は言いたかったんですけど、私は小心者だからそういうことを言えないだけの話。

③ 最も退屈な授業



で、なんで今の大学教育が問題かっていうのは、次のYouTubeね。紹介しますけども、よろしいですね。これは、前回のYouTubeに紹介して皆さんに笑ってもらったんですけど、今度は、もう忘れているかもしれないから、もう一度笑ってもらおうという風に思っている。じゃあお願いします。＜YouTubeの再生＞

はい、ありがとうございます。このYouTube前回も見てもらったんですけども、この授業、どこが問題ですか？私のような年配人にとっては素晴らしい授業だと思っているんです。準備をしてきて、板書もしているし、繰り返し説明してくれるし、何が問題か？私は何も問題ではないと思うくらい良くできていると思うんです。

ところが、今の学生が違うんですよ。昔の学生とは違うんです。「そんなこと言っても、それは先生が教えたいことなんですよ。私が聞きたいことじゃない」と、こうくるわけですよ。だから授業内容的には間違っていないんだけど、やはり問題があるんじゃないかという。こういうことですね。

最も退屈な授業！！

- 1) 教員の独壇場で学生は蚊帳の外にいる。
- 2) このような教室では主体的学びは育たない。したがって、アクティブラーニングも生まれない。
- 3) そのような危機感から、文部科学省はアクティブラーニングを促進するようになった。
- 5) その契機となったのが、1995年頃からアメリカで起こりはじめた「パラダイム転換」である。
- 6) 「パラダイム転換」とは「教育パラダイム」から「学習パラダイム」へ転換することで、図で示せば、次頁のようになる。

<2>学習パラダイムって何なの？

④ パラダイム学習転換

「最も退屈な授業」ということで、こういう授業がいま、人気がないというか、「学生にインパクトを与えない授業はどうか？」という発想がでてきたのはパラダイム転換のお陰でなんですよ。

それは1995年が境目だったんですよ。皆さん方、1995年何をしていましたか？胸に手を当てて考えてください。（一同：笑い）

1995年がこの転換の節目に当たったんです。それまでは大学の先生、素晴らしかったんです。大学の先生、本当に良かったと思いますね。こういう問題もないし、授業アンケートでうるさいことを言われることもないし、FDもないしね、まあ、フードアンドドリンクもなかったと思うけれども、うるさいことはなかった。また学生もある程度よかったじゃないですか。ここで1995年から以降ですよ。大学の先生は1995年までいい方です。だんだん悪くなるんだから。期待しないほうがいいですよ。もっと悪くなる。（一同：笑い）学習パラダイムも、もっともっと進みます。ということで、どこがどう違うのか、その原点に戻って皆さん方に説明したいと思います。

<2>学習パラダイムって何なの？

④ パラダイム学習転換



はい。左側（Teaching Paradigm）が1995年より前です。さっきのYouTubeであった奴ですよ。教壇に先生がいて、これはまだいい方ですよ。

これは縦の関係ですよ。先生が教壇にいて、そして学生が床にいる。こういう授業形態が今変わっていますよね。教壇というのがもう成立しなくなりました。アクティブラーニングには何が良くないか。教壇が良くないんです。教壇はアクティブラーニングの敵ですね。教壇がなぜ良くないのか。背が低い人が高い所から見た方がよいんじゃない。

教壇はなぜ良くないか。正面がわかるからです。アクティブラーニングは正面がないんです。学生がいるところが正面です。ですから、ここのアクティブラーニングの教室というのは周りが全部ホワイトボードです。だから学生がパッと行ってグループで発表したことをみんなに共有するところで、ホワイトボードに書きます。ここが正面になるわけです。で、向こうの学生が向こうを使ったら、向こうが正面。だから、正面がないんです。

学生が立つところが正面です。これすごく大事なことです。アクティブラーニングというのはもう、定義自体がすごく広い。それぞれの先生がアクティブラーニングは何か。と言った時にね、双方向授業だとか、ビデオ使うとか、討論するとか色々なことを言うけど、全部正しいけれども、もっともっとあるわけですよ。

私が一番インパクトを持ったアクティブラーニングはカナダのキーンズ大学ですよ。これは世界一のアクティブラーニングスペースを持っているんです。

私も何回も行ってみたんですけどね。ここは、教室が全部ホワイトボードになっているんです。で、固定式の机は勿論ない。可動式の机のみ、ここ（会議室）だって可動式の黒板のみで可動式の机と椅子ですけど、キーンズ大学の准教授でDr.アンディ・デガーというこのキーンズ大学のラーニングスペースの責任者が「アクティブラーニングっていうのは学生が椅子から立ち上がって、自分の考え・意見をホワイトボードに書くこと」っていうの。凄いですね。オリジナルですよ。

要するにアクティブラーニングが最も嫌っているのは座ったままということ。座ったままがダメなんです。立つこと、立ち上がるということですね。立ち上がって、自分の意見。だからノートは取らせませんよね。ノートは取らせないで、アクティブラーニングはここで自分の、あるいはグループの意見を共有する。と、こういう事なんです。

図の左の方はTeaching Paradigm。書いてありますね。右の方はLearning Paradigm。左と右を比較して右の方は風船が飛んで行っている、そういうことではないんですけど。（一同：笑い）右と何か違いわかります？

右側はディスカッションしていますよね。で、左の方が縦の関係。右は横の関係ですよ。だからアクティブラーニングは横の関係です。で、いま授業、ゼミなんかやっていますね。

我々が考えるのは「横の関係を授業にどうもってくるか」ということです。縦の関係はもうAIに任せましょう。と、こうも言えるわけです。

AIが得意とするのは知識を授けるということですから、横の関係のファシリテータになれるのが先生であるし、先生でなくても学生になれる訳です。チームリーダというのがちゃんと出てくるわけです。私は戦後教育史が専門ですから、これを私の専門分野に充てはめて言えば…ですね、左が戦前のタイプ。右が戦後のタイプです。これを童謡に例えて、子供の童謡です。歌に例えることができる人います？

（受講者：左は何だ？（話し声）めだかの学校、左が、めだかの学校。逆じゃない？）

はい、そして、左は何？左は何の学校？

“すずめの学校”ですよ。皆さん、一緒に歌ってみます？

♪すずめの学校は鞭をふりふり、ちーぱっぱ♪

左側のTeaching Paradigmは誰が先生か生徒かバッチリとわかっている訳です。鞭をふっているの

は先生ですね。

ところが、右側の Learning Paradigm の“めだかの学校”は誰が生徒か先生かわからない。みんながある時は先生であるし、ある時は先生であると。

これ、すごく偶然だけど、私はこれね、良い説明だと思っているんです。ですから、私はいつのまにかこの授業では先生でなくなったんですけど。（一同：笑い）

これね、いまの学生なんかに説明する時、こういう授業形態で私たちはやろうとしているんだよということを説明するのに非常に良いかなと思います。



これを大きな IVY リーグ、スタンフォード大学じゃなかったのかな、大きな授業で示すと、上がティーチングパラダイム。下がラーニングパラダイム、ですね。

上はティーチングパラダイムの内容は Old Paradigm（古い規範・考え方）、下のラーニングパラダイムでは New Pedagogies（新しい教育・教師）で、Active, Collaborative, Evidence based が記されています。アクティブラーニング、コラボレイティブ、エビデンスベースという新しい最近の言葉というのは全部ここから出てくる訳。面白いですね。

⑤ 学習パラダイムと ICT（情報機器を用いた教育）

学習パラダイムとは何か

- 1) 学習パラダイムとは、教員中心の一方向的知識の伝達から、学習者中心のグループ学習への転換である。そこにアクティブラーニングが生まれる。
- 2) ICT を多用すれば、アクティブラーニングがうまく行くと考えるものもあるが、それは「幻想」に過ぎない。
- 3) いかにすれば ICT とアクティブラーニングが「融合」できるかを考える必要がある。それが「授業デザイン」である。
- 4) ICT を活用してアクティブラーニングを促すには「授業デザイン」を考え直すことが先決である。これについては、後で述べる。

帝京科学大学 FD 講演会（2018 年 11 月）

学習パラダイムの話をしました。学習パラダイムの中でね、「ICT（Information and Communication Technology の略）を使えばアクティブラーニングは上手くいくんだ」と、そういう話がいっぱいあるんですよ。ICT を使えばいいと言うような。

でも、ICT を使えばアクティブラーニングがうまくいくと言うのはね、幻想に過ぎないと思うんです。本当に。ICT を使わなくても、アクティブラーニングはやれると思います。スクラッチクイズを使ったって、これマニュアルですよ。別にクリッカーを使わなくてできる訳です。だけど、そう言うことを、自分で与えられた環境の中で、どうすればアクティブラーニングができるのか、例えば、「うちの教室はホワイトボードなんかありません」しかし、どこにでもポータブルのホワイトボードがありますね。「いや、先生簡単なホワイトボードがあればありますよ」そう言うのを使って、文房具を使えばそれでもできる訳です。だからそう言うことを考える。ここが大事であって、その ICT を使うことが大事ではない訳ですよ。

この ICT 分野の進んだところがブラックボード社で、この会社にごゲストスピーカーとして呼ばれてアクティブラーニングの話をしたんです。なぜ、私ですか？ 私は ICT を使いこなしてないのだから。そしたらね、担当者が言うことには、「先生が話した方がインパクトがある」と、言うんですよ。“ICT を使えない人が、話す方がインパクトがある”と言うんですよ。ICT を使ったら普通でしょ、という感じね。

だから、ICT 等の教材や考え方をいかにこう、上手く活用するかと言うことを考えるのが授業デザインなんですよ。今日は皆さん方にこれをしっかりと理解してもらいたいと思います。

日本の現状と課題

- 1) アメリカは「パラダイム転換」を FD によって克服した。FD とはファカルティ・ディベロップメントのことで、大学教員を教育パラダイムから学習パラダイムへ移行させるための研修である。
- 2) 日本の「学習パラダイム」の現状を測るバロメーターがある。これはアメリカのデータであるが、日本でも通用する（次頁のデータを参照）。
- 3) 「学習パラダイム」は前回も紹介したが、これはアクティブラーニングの起点となるものである。

皆さん方、授業デザインと、授業シラバスの違いがわかりますか？

シラバスというのはね、正式な名前は、授業シラ

バス。コースシラバスと言いますから。授業シラバスというのは日本ではシラバスと言っているんですけど、正式には授業シラバス。これは授業シラバスと授業デザインがどう違うのか、どう違うのか。みんなゴツチャにしているんです。でも、授業シラバス、普通のシラバスと授業デザインは全然違うという事を今日は勉強してもらいます。

ここで日本の現状、日本がいま学習パラダイムという振り子が動いているとしたら、何処に日本の現状はあるのかということを皆さん自身が知って貰いたいです。

日本はいま1995年に学習パラダイムが起こった。それから何年ですか。いま経っている訳ですね。いま日本の学習パラダイムの振り子は何処にいるんですか。右ですか。左ですか。

ね、意見が分かれるところですよ。そこで参考になるのがこれですよ。

⑥ 学習パラダイムの現状と課題

パラダイムの現状と課題		
	教育パラダイム	学習パラダイム
① 使命と目的	* 教育を提供/伝授する * 知識を教員から学生に移譲する	* 学習を生み出す * 学生から知識の発見や考えを誘い出す
② 成果の基準	* インプット、資質 * 入学する学生の質	* 学習と学生の成果の結果 * 卒業する学生の質
④ 学習理論	* 知識は“外に”ある * 学習は教師中心に管理される * 才能や能力は与えられる	* 知識は一人一人の心の中にあり、個人の体験によって形成される * 学習は学生中心に管理される * 才能と能力がふられている
⑥ 役割の性質	* 教員は主として講義者である * 教員と学生は独立して別々に行動する	* 教員は主として学習方法や環境の設計者である * 教員と学生は一緒に、あるいは他のスタッフも加えてチームで活動する

出典:「教育から学習への転換」ロバート・B・バー&ジョン・タッグ『主体的学び』創刊号、(東信堂、2014年)7頁から作成

帝京科学大学 FO講演会 (2018年11月)

これはジョン・タッグ博士の論文を翻訳した一部です。で、ここに左側に教育パラダイムで右に学習パラダイム。教育パラダイムから学習パラダイムに移行する際に、内容としてわかりやすくするためには、教育パラダイムでは教育を伝授する。学習パラダイムに移ると、教育を伝授するのではなくて、学習を生み出す訳ですよ。これは学生自身が学習を生み出すものです。で、成果の基準でもインプットというのが教育パラダイム。学習パラダイムでは、アウトプットです。ということは、インプットからアウトプットに変わっているんです。

この表の④の学習理論のところにある知識は、教育パラダイムでは外にあるって言っているけど、学習パラダイムでは知識は個々の学生の中にあるという認識です。

で、こういう風にこう見てくると、この違いがわ

かる訳です。日本はあるところは学習パラダイムに到達しているかもしれない。あるところは未だに教育パラダイムかもしれない。あるいは中間かもしれない、というような認識です。

これらはアメリカのパラダイムの価値基準ですけどもね、日本でも当てはめて考えることもできるかな、という風に思っています。学習パラダイムの現状と課題ということで、実は帝京大学でこの2人に講演をして貰いました。

これはもう世界的な賢者ですよ。この左側が学習パラダイムの提唱者のジョン・タッグ博士で、こちら右の方がFDの分野の世界の賢者フィンク博士、この2人が対談したんですよ。これ、世紀の対談ですよ。なぜかという、アメリカでも実現しないですよ。日本だから実現したんです。実はね、日本に観光に来たついでにやったから。だから、アメリカではもう殆ど不可能に近い。そのために私は、富士五湖に連れて行きました。私は一生懸命、連れて行った、このために。(一同：笑)

で、この後の2人の対談は今日持ってきてないんですが。大きくですね、教育学術新聞に出ています。もし機会があったら、PDFにしたものを送ってあげますけれども、すごく学習パラダイムとFDについての話をしております。

で、これから紹介するのは、フィンク先生、右側の先生。フィンク先生に言わせると、アクティブラーニングが3つの領域があると言っているんですよ。

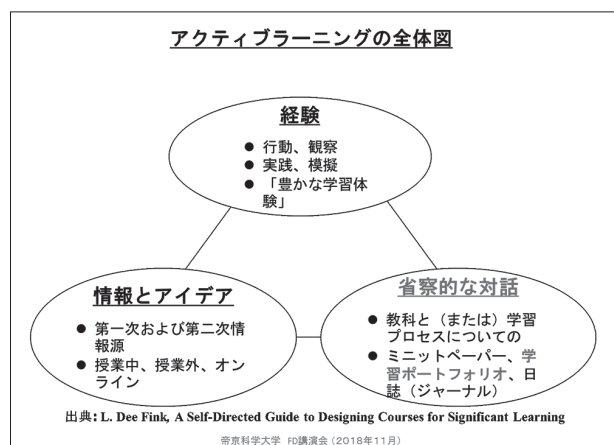
⑦ アクティブラーニングの全体像

1つが(1)情報とIDR (アイディア)、で、真ん中が(2)経験：行動、観察の経験、赤字のフォントで書いてある(3)省察的な対話。で、これは、互いに繋がっているという見方ですね。この(1)、(2)、(3)が上手くバランス良くいっているとアクティブラーニングをこなしているのだということが言える訳です。こうなってきた時、皆さん方に質問します。

(1)情報とアイデアのアクティブラーニング

(1)のなかに実は読書も入ってくるんです。皆さん方に、読書はアクティブラーニングなのか、どうか





と聞かれた時、どう答えます？本を読むことは、アクティブラーニングですか。どうですか。授業に出るというのはアクティブラーニングですか。どうですか。と聞かれた時に、私たちは何と答えたらいいのでしょうか。さあ、どなたでも結構です。

（司会者 渡邊：アクティブラーニングの一部です。）

アクティブラーニングの“一部”ですか？賢いんですね。上手く逃げましたね。（一同：笑い）一部ですよ。はい、そうなんです。答えは。要するに「読書の時に読みなさいと言われて読む」のは、これはアクティブラーニングではないね。「主体的に読もう、興味を持って読もう」というのは、アクティブラーニングです。だから、読むことは、読むこと自身には関係ないんだけど、「どう読むか」ということです。この辺りがすごく大事なことです。

この(1)の中には授業中、授業外があります。ここで授業中はみんな寝ている。これじゃあ寝ていたらアクティブラーニングはならないですね。起きていてもボーッととして授業に参加しないとアクティブラーニングにはならない。

さあ、どうします？どういうのを授業のアクティブラーニングだと言う？皆さん方の学生はアクティブラーニングですか？

じゃない？みんな首を振っていますね。もっと大きく振りましょう。（一同：笑い）アクティブラーニングではない！何でアクティブラーニングではない？今の雰囲気は、ちょっとチョコちゃんみたいな（一同：笑い）感じだったね。なぜ、アクティブラーニングではない？どう渡邊先生？

（司会者 渡邊：授業を受けているだけ。）

授業を受けているだけ、受けているだけなんだけど、じゃあどうしたら受けているだけの授業がアクティブラーニングに変わるんですかね。どう渡邊先生？

（司会者 渡邊：考える授業にします。）

考える。非常に優しい言い方ですね。考えるって言ってもね、考えています。と言うね、学生は。どうしたら考えるアクティブラーニングになるか。

これは非常に、大事な問題ですよ。これは私がやっている方法ですけど、学生に授業を聴きながら質問を作らせるんです。要するに授業を疑問形で聴くと言うことです。で、そんなこと言ったって学生ね、そんなことはしない。しないのでこうしました。

私が担当する1年生の科目は全部、試験問題を学生が作ることにしたんです。学生が試験問題作らなければいけないんですよ。もうこれ決まりだから。

しかし、突然最後の方になって、「君達に試験問題作ってもらいます」。これはルール違反です。アメリカだと訴訟されますね。なので、オリエンテーションの時に、「この授業は学生が試験問題を作ります」と言うことをちゃんと明言しているわけです。

私も明言するわけです。学生が試験問題を作るわけですよ。もうこれは作るに決まっているんだから。作るためにね、学生はどうして聴かなければいけないか。授業をクエスチョンマークで聴かなければいけない。質問を作らなければいけないからです。

そうすると、学生は非常に要領がいいから、ポイントを掴んでくるわけですよ。ただ、だらだらと聴いているんじゃなく要点は何か。先生は何をここで言いたいのか。質問をワンセットにして作らなければいけないから。そうすると、非常に身になる。主体的に学ぶことになるわけね。読書もそうですよ。ここ何書いてあるんだろう。クエスチョンマークで読むわけですよ。だから、クエスチョンマークが先ほどちょっと出てきたけど、全てなんですよ。本を読む時、授業を聴く時、話をする時、常にクエスチョンマークという意識があれば、非常に良いということですね。だからここでも言われているように。

(2)経験：行動、観察の経験

次に経験のところ、経験は即“アクティブラーニング”とみんなは言うんですね。例えばここに書いてあるように、行動、観察、実践。これは誰も“経験”しないとわかりませんよね。とくに実習学習経験：教育実習、看護実習、病院実習、保健所実習等々。

しかし、ここでの“行動”を“経験”って言うのは、皆さん方、どういうことを意図しますか？例えばグループ活動するとか、双方向の授業をすると

か、まあ、動き回ると言うイメージが非常に強いです。ですから、「～実習をやって色々経験したからアクティブラーニングをやった」と思ったら大間違い。

しかし、そうじゃないですね。行動しているとき、行動後に経験として考える。わかんなかったら質問する。これがないといけない。また、実際には経験していないけどシミュレーションして考えてわからなかったら質問する。そういうそのものだという風にフィンク先生も説明しています。

(3)省察的な対話

そして、今日看護学科の先生が多いけども、この省察的な内容は振り返るわけです。

学びとは何かと言うことです。ここ、新しい概念ですよ。ここでの“学び”とは“新しいこと”を学ぶのではなく、新しいことを学ぶことよりも、今まで学んできた“学習プロセスを振り返る”ことです。

私、何を学んだの？この授業で何を学んだの？という振り返りですね。もし学んでなかったら、なぜ学ばなかったの？先生の教え方が悪かったの？私の学び方が悪かったの？というその学びのプロセスを振り返るってこの省察的なことが大事です。省察的なものは学生の場合、「自分で振り返りなさい」と言ってもなかなか振り返ることができない。先生方もそうだと思います。だから本ワークショップがあるわけです。そしてそれぞれがメンティ（被生育者）やメンター（指導者）になり助言や対話によってアクティブラーニングしていくわけです。

「はい、15分間時間をあげますから、今日ここまでのところでゲーリー先生から学んだ事で、何がフックしましたか？」と言うことをここで、お互いに対話するわけですよ。で、そうするとこれは正しく省察的な学習パラダイムです。

“一人ではなかなか振り返ることはできないけど、対話だったら振り返ることはできる”

で、アクティブラーニングという方向に向かっていきますけども、実はアクティブラーニングの表現には2つあるんです。

<3>アクティブラーニングと教室外授業との関係

⑧ アクティブ・ラーニングからアクティブラーニングへ

ゲーリー先生は怒っています。文科省はアクティブ・ラーニング。ゲーリー先生はアクティブラーニング。これ私が一番に言ったのよ。一番といっても、一緒に言っているのが先程冒頭で紹介した、溝

アクティブ・ラーニングからアクティブラーニングへ

- 1) アクティブラーニングの表現にも齟齬がある。文科科学省は「アクティブ・ラーニング」として促進している。両方ともたいてい違わないと考える識者もいるが、そこには大きな違いがある。
- 2) 文科科学省が推奨する「アクティブ・ラーニング」は、教室でアクティブラーニングを教え・学ばせるという姿勢である。これを次頁の4コマ漫画で紹介する。このような考えは高校までしか通用しない。この4コマ漫画は前回も紹介したが、文科省の影響力の大きさを知るために繰り返す。
- 3) アクティブラーニングは方法論のことで、この技法を「用いて」教え・学ぶことである。すなわち、アクティブラーニングはツールに過ぎない。したがって、どのような科目であってもアクティブラーニングの方法論を用いることができる。

帝京科学大学 FD講演会 (2018年11月)

上先生、京都大学の溝上先生はこれを尽く怒っているわけです。「何でアクティブとラーニングを分けるんだ。アクティブラーニングだ。一つの表現でなければいけない」ということなんです。

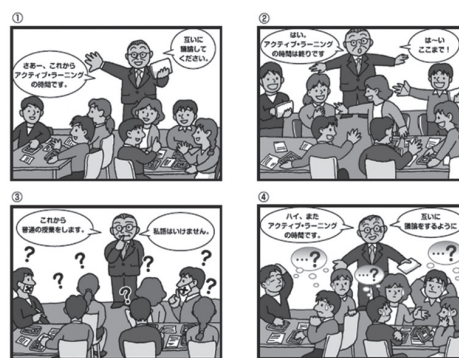
ところが、こういうアクティブ・ラーニングというと、「アクティブラーニングは教室内でやるのがアクティブラーニング」だと思っているふしがある。じゃあ、教室外でやるものは、アクティブラーニングではなくて、「あれは教室外活動だ」とこう言っているわけです。

でも、教室外活動が本当のアクティブラーニング。なぜかという教室内で学んだことが、活かされるから。それは、実践的なアクティブラーニングであるということです。ところが、残念ながら文科省がやっている、このアクティブ・ラーニングというのは、そういうことをさせていないということですね。で、これ面白く漫画で私が作りました。これ見てください。

⑨ アクティブラーニングはこれで良い？

主体的学び研究所

アクティブラーニングはこれでいいのか？



詳細は「主体的学び」4号をご覧ください

mediasite

帝京科学大学 FD講演会 (2018年11月)

この漫画を見ると、①先生が「はい、これからアクティブラーニングの時間ですよ。皆さん大きな声

を出してスクラッチクイズやりましょう」というような感じですね。10分くらいやったら、②「はい、アクティブラーニングの時間は終わりです。元の席に戻って」③「はい、これから普通の授業をやりまします」と普通の授業に戻るわけ。でまた、④「はい。じゃあ、これからまたアクティブラーニングやりましょう」もう、生徒は混乱するわけですよ。アクティブラーニングというのは、一つの言葉、表現であるから、形式的にこだわりはないのです。じゃあどうするの？

ここで、ゲーリー先生はアクティブラーニングについて、あちこち全国で講演しますが、そうするとよく質問されます。「先生、アクティブラーニングは、数学では使えませんよ。理系ではダメですよ」

それは、アクティブ・ラーニングにしているから。アクティブラーニングは、ツールそのものであるから数学だったとしてもいいはずですよ。物理だったとしてもいいはずですよ。

これはアクティブラーニングと一つの言葉で使ったら、どんな科目であろうと、どういうシチュエーションであろうと、使えるということです。でも、文科省はやっていることはアクティブラーニングを教室だけで止めているわけ。だから、社会に出たら何の役にも立たないですよ。折角アクティブラーニングをやっても社会じゃ使えないという、そういうことです。文科省のやっていることは全て正しいことではないですよ。教室の中だけで、平和であればいいと。でも、本当は社会に出てからが大事でしょ。という問題提起もさせていただきます。

先ほどの溝上先生の日本記者クラブでの記者会見のところで、溝上先生曰く「アクティブラーニングの導入が飛躍的に伸びてる」と言うんです。もの凄いデータで示されたんだけど、それにも拘わらず教室外学習が殆ど伸びていないんです。これ、何？と言うのが、溝上先生の提起ですね。

アクティブラーニングと教室外学習

- 1) アクティブラーニングの導入が飛躍的に増加しているにもかかわらず、「教室外学習」が全然伸びていない。不思議である。
- 2) 大学設置基準の中に単位制度というものがある。たとえば、日本の学生は週に15コマ近くを履修している。これをまじめに計算したら、週30時間の教室外学習時間が要求されることになる。
- 3) 戦後日本の大学制度は、アメリカを模倣した。アメリカではコミュニティ・カレッジを含む大学のすべてで学生の週の学習時間の平均は12時間と言われる。アイビーリーグなどの大学では週25時間の教室外学習をしている。これが世界的基準である。
- 4) 講義を聴くだけでは伸びない。自分で考えて、教室外での課題や応用に取組む必要がある。このことが社会に出てから役に立つ。

帝京科学大学「FD講演会（2018年11月）」

⑩ 1週間の授業（教室）外学習時間は？

ここからは大学の先生、皆さん方分かっていきますよね。これは私の専門ですけど、大学設置基準の中に単位制度と言うのがあるんです。単位制度はどういう風になっているかわかります？単位制度は3つに分かれているのですね。

3分の1が講義、3分の2がね、教室外学習、予習復習。これはもう決まっているわけです。皆さんわかっているでしょ。わかっているけど、わかっていないんです。何故わかっていないか、みんな講義の3分の1で試験をやって単位をあげているから。

3分の2はどこに行ったんですか。皆さん方、3分の2単位分の評価あげています？殆ど3分の1の講義であげていますよね。その証拠に一発試験をやっているわけですよ。これは間違いです。本当は3分の3で単位出さなきゃ。予習、復習などで皆さん方、学生評価しています？（司会者 渡邊：「はい、私はやってます」）

はい。珍しい人がいますけど、（一同：笑い）

確かに反転授業的なことでやればできるんですよ。でも、なかなか現状ではできない。

その証拠に溝上先生が言っているのは、日本の学生は、あの帝京科学はどうなっています？日本の学生は週15コマ取っているんですよ。12とか13とか。こんな取れるわけがないでしょ。まあ、渡邊先生はアメリカに行っていらっしゃるからね、わかると思うけど、まあ、最高で取れて学生は週3科目から4科目ですよ。で、下の学年に行けば、もっと難しくなると思うんですよ。で、何故取れないかという、3分の2の予習・復習に時間がかかってくるから。例えば、日本の学生が週15コマ仮に取っているとしたら、教室外学習はその2倍ですから、1時間1コマの授業に対して2時間の予習・復習となっていますから週30時間ですよ。週30時間、週15コマ取っていたら、ほかに何もできませんよね。

マックでアルバイト？できるわけがないでしょう。でもこれができているんです。できているところじゃなく、学生はAを取ってくるんですよ。普通Aなんか取れるわけがないでしょ。でも取っているんです。

凄いですね。でも、これは問題にしなきゃいかんと。アメリカの中堅大学では授業外の予習復習時間が週12時間平均。で、IVYリーグなどのちょっとレベルの高いところで週25時間。これが世界的な基準です。

で、なぜ溝上先生はこれを問題にしているかとい

うと、学生は3分の1の講義だけでは伸びないと言うわけですよ。3分の2の自分で考えて、教室外で課題を何かやって応用したり取り組んだりすることが社会に出てから、あるいは大学の上級学年で役立つのに、それをやらせない。

1 週間の教室外学習時間

- 1) 教室外学習時間に関するデータでは、2013年と2016年を取り上げ、「授業における教室外学習を1週間で何時間やりますか」との質問をした。2013年は1年生が4.91時間で、2016年は4.34時間と減っている。この数字は2000年以降から同じ傾向を辿っている。
- 2) 文科省が色々な改革を断行しているが、日本の学生の学習時間は1週間に約5時間である。
- 3) しかも、データによれば、学習時間数は減っている。最低でも、10～15時間が必要である。本来伸びなければならない3年生でも学習時間が減っている。
- 4) 原因はどこにあるのか、対策は取られているのか。日本の学生が教室外学習をしないのは、成績評価に反映されないからである。

帝京科学大学 FID講演会 (2018年11月)

じゃあ、日本の学生は30時間の勉強を教室外でしなければいけないのにも拘わらず、皆さんこの数字みて。2013年、日本の学生の勉強時間は週に5時間弱ですよ。2016年はもっと下がっているんです。3年生になるともっと下がっているっていうから、これどうします？まあ、重症ですよ。文科省がありとあらゆる手段を使っているけど、日本の学生の教室外学習時間は、1週間5時間が限度です。必要なのは30時間ですよ。それが5時間ですよ。これで日本の大学の質が高いとか、議論できないでしょ。

原因はどこにあるのかということ。対策が取られているのか。取られていないですね。なぜ取られていないのか。教室外学習は大事であるということはみんな認識している。大勢が。

では、我々は教室外学習をやってきた学生とやってこない学生をどう差別しているのか、差はつけていないんですね。だって、皆さん方がやっているのは一発勝負の試験だから。学生は教室外学習が成績に反映されないなら、賢い学生は絶対教室外学習をやりません。やって、どうするの。学生は勉強を自宅でやりません。これではなかなか、日本の大学の質は上がらない。これはもう危機的状況ですよ。

⑪ 実験の失敗

私はこの単位制が自分の専門でもあるということから、実験授業を帝京大学の理事長・学長に特別にお願いして始めました。これは、2単位の一般教養セミナー・初年次教育の授業を4単位に変えたんです。その代わり物凄い教室外学習を課したんです。

実験の失敗

- 1) 企業は大学における単位制、すなわち教室外学習時間に注視すべきである。なぜなら、これがアメリカとの決定的な違いであるからである。
- 2) 教室外学習は、大学改革の「切り札」と考えている。そこで、学長から特別許可をもらって、2単位の授業を試験的に4単位にして、学生の教室外学習時間を高める実験をした。しかし、結果は失敗に終わった。
- 3) 4単位を授与すると言っても、学生は教室外学習時間を増やすことに難色を示した。その結果、多くの学生が履修放棄し、逆に「楽勝科目」に逃げた。
- 4) 日本の学生は、講義で伝達されたことだけが「学び」だという習慣が染みついている。これは教員も同じで、高校までの悪影響である。

帝京科学大学 FID講演会 (2018年11月)

ついてきた学生、4単位取ったのは2人しかいなかったんです。殆どの学生が、「4単位の授業、いらん」って言ったんです。「4単位の授業するぐらいだったら2単位の授業を3つ取る。単位数も多くて楽だ」と言っている。だから教室外学習を課せば課すほどすごく大変なんです。大変だからふつう15コマなんか絶対取れないんです。でもそれを取っているね、それを許可している文科省も文科省だと私は思います。現実的には無理です。だから、そういうことで「頑張って4単位やろう！」って言ったってね、もう全然、「先生結構です。4単位いりません。2単位で結構です」で、「このレベルだったら2単位のクラスが3つ取れます」というわけです。そりゃそうですね。そっちに流れます。楽勝科目に流れます。

で、日本の学生というのは、非常にこう染まっているというのか、そういう風になっている。“3分の1の講義で教えられたこと”が学びだと思っているわけ。教室外学習はもう付録だと思っているわけ。その時、皆さん考えてご覧なさい。教室外学習が3分の2だから、これがメインにならなければいけないんです。なんで3分の1の方がメインになるんですか。これは3分の1がメインで3分の2が付録なんですよ。

一般の大学の先生もまた同じ考えなんです。[俺の授業を受けてたら間違いない]というんです。

面白いエピソードを紹介します。この話を北海道大学でやったんですよ。いまのこのエキサイティングな話があったんです。講演後にパッと手が挙がってきて、「ゲーリー先生大丈夫です。うちの学生は勉強、予習復習はしなくてもちゃんと私がその授業をカバーします」

わかります？歯車が全然合っていないんです。私は先生に「手抜き」をしてほしいと言っているわけですよ。悪く言えばね。私は“あまり教えすぎないで学生に学習させるように努力しましょう”と言っ

ている。

にもかかわらず「いや、学生がそんなことをしなくても学生にはわかるように私が、噛み砕いて教える」というんです。噛み砕いて教えたら、もっと学生はダメになるんですよ。いい先生というのは、何もしない先生です。

私はアメリカに行って、カリフォルニア大学でこの大学で一番学生に人気のある先生のゼミをみせてください、と。連れて行ってもらったんです。最初から最後まで誰が先生かわからなかったですね。ただ、居るというだけです。でもそれでちゃんと学生がやるんです。だから、教員の仕事というのは“なんでもかんでも、学生の分までぶんどって教える事”ではないんです。教える事が親切だとは思いません。間違いですよ。教えないことの方が、私は案外学生のため、と思っています。

NHKの“あさイチ”でやっていましたよね。最近サービスが過剰だから、そのお客様も過剰に反応するというような話が出てきていましたね。過剰な反応を期待すると。もっと期待してちょっとしたことでもすぐ「マネージャを呼べ」。氷水を持ってきたら、氷水が洋服に落ちて、ウェイトレスが謝るんだけど、「お前じゃダメだ。マネージャを呼べ」って大騒動になったことが紹介されていました。

昔はそのようなことはなかったんです。今は、“お客様は神様”だということで、一生懸命やるからお客様もね、そういうものだと思っているわけ。

だから先生方、学生に一生懸命やり過ぎると、学生もそういうものだと思っている、“もっと先生がやってくれる。”と思っている。“もう何もしなくてもやってくれる。”と思っているから。こうなってもらっては逆効果ですよ。先生はやっぱり厳しいところもなければいけない。

<4>アクティブラーニングを促す授業デザイン

⑫ アクティブラーニングのシラバス？

で、アクティブラーニング、授業デザインとアクティブラーニングの話をします。

シラバス、これを毎年先生方、書くわけですよ。それはそうですね。シラバス書きますよね。シラバスに「アクティブラーニングをこの授業でやります」と書く。で、シラバスに書いたからといって、それは書いたか、書かないかに拘わらず、アクティブラーニングは教室で動いているとは思えないんです。

アクティブラーニングをうまく動かすためには、シラバスよりも“授業デザイン”の中にこれを入れ

ていくと。“授業デザイン”とは新しいことば。デザインするんです。先生方の“授業をデザイン”してください。

アクティブラーニングを促すシラバス

1) 多くの教員が授業デザインと授業計画（シラバス）を混同している。たとえば、授業計画やシラバスにアクティブラーニングを入れれば、うまくいくと考えているが、これは大きな間違いである。

2) 授業計画（シラバス）に盛り込むまでに、授業デザインが必要である。たとえば、なぜ、この授業でアクティブラーニングを導入する必要があるのか。そのことで、どのような変化を学習者に起こすことができるのか。アクティブラーニングをどのようにアセスメントするのか等々、多くのことを熟慮した上で授業デザインする必要がある。次頁のスライドを参照。

帝京科学大学「FD講演会（2018年11月）」

そして一部がシラバスになってでてくるだけで、一番大事なことは、“授業をデザインする”ということはどういうことなんです。来年はどういう授業をやってみようかな。過去の反省を踏まえて、こういうことをやってみよう。あるいは、学会に行つてこういう新しいことがあったら、こういう授業を取り入れてみたい。漠然とした考えでいいんです。とにかく何が大事かという、と、“今までと違った授業をやってみよう”という意識ですよ。先生方、好奇心を持ってください。今までと同じ授業はダメ。違った授業をやろう。気持ち的にも頑張って違った授業をやろうと思ってみたら去年と同じだったという事があるけど、それとはやっぱり気持ち的にちょっとなんか変わったことをやってみよう。一部でもいいから、例えばスクラッチクイズを導入してみようとか。そういうことが“デザインすること”です。これを考える。“学生を想像しながら考える”わけです。

しかしながら、なかなか日本ではできない。なぜできない。構造的欠陥なんです。先生方、構造的欠陥だと思いませんか？ 皆さん、シラバスを書くのは、11月か12月でしょ。で、その学生というのは4月に入ってくるわけでしょ。学生いないもの。これで、シラバス書けつというわけ？ ね、教務課も酷いことを言いますよね。

これ全国的にそうだけど、これ、誰も文句を言わないけど、私は文句言っているわけ。“できるわけじゃないじゃん”。そして挙句には、「シラバスに書いた内容を変えないでください」私は変えたくないよ。学生が変えさせているんだから。私が思った学生が入って来なかったんだから。

学生なんて、「こんなことは習うつもりではな

かった」と、文句言っていますけど。先生も文句言いたいです。でも現状はそうなっているわけ。これは構造的欠陥だから直せないんですよ。何が構造的欠陥なのか。文科省が進めていて、文科省は「電子媒体で流しなさい。情報共有しなさい。ネットで公開しなさい。ネットで公開するためには11月が限度ですよ」とこう言っているんですよ。

⑬ 熟慮を重ねる

私はどうしているかということ、大学に出すシラバスと私が授業でハンドアウトする資料は別ですよ。大学で配るプリントや教材、これら教室で配るのを学生は念頭に置いて考えてくるから。じつはある程度、授業の内容に流動性というのかな、柔軟性ができてくるわけです。

シラバスの内容と実際の授業内容の二重構造的なものにしなければ、授業内容を柔軟にするのは非常に難しい。で、“こういう風な授業をどういう風にしようかな”と考える、“**熟慮する**ということが**授業デザイン**だ”という風に思ってください。皆さん方、熟慮してくださいね。しっかりとね、けれども、熟慮しても1人では熟慮できないんです。1人で熟慮すると座禅になるんです。座禅はダメ。

じゃあどうするのか。やはり友達ですよ。仲間と「あなた来年どういうことをやろうと思っている？」っていろいろ話をして、「私これやろうと思うんだけど」。で、「どういう風にやる？」そこで情報を交換したらいいんです。そうすると**情報交換した熟慮から具体的な授業デザイン案が出てくるんです**。ただ、じっと座っていても“棚からぼた餅”ではアイデアは落ちて来ない。アイデアは動いて初めて自分の手元に寄ってくるわけです。動かなければ何も変わらない。ということですね。



実はこの問題提起、私はずっと長年悩んでいたんです。で、先程のFD家のフィンク先生にこの話を私が対談でぶつけたんです。「本当にアメリカの

先生方は“授業デザイン”と“授業シラバス”をちゃんと区別して理解しているんですか？」と聞いたんですよ。だって“授業シラバス”も“授業デザイン”もアメリカから来たんですから。で、私はフィンク先生にその質問をしたら「アメリカ人が最も解っていない」と言われた。(一同：笑い) だから、皆さん解っていないんです。先生方安心して。(一同：笑い)

実はこの“授業シラバス”は本当にいまうるさくなっているんですよ。

ところで“授業シラバス”がいま何に使用されているか知っています？じつは、訴訟対策に使用されているのです。アメリカの学生は、自分が勉強しなかったくせに「落とされた」って言ってすぐ訴訟するんです。しかし、これがあれば訴訟になった時に逃げられる！裁判の証拠資料がシラバスです。しかし、先生方が書いたシラバスは自分の部屋に置いては裁判の証拠資料にはならないんです。それは皆さん方のスクラッチクイズと一緒に、都合が悪くと消して書き直すかもしれないから。だから裁判の証拠資料としてのシラバスは学部長、学科長のところに4月の段階で、納めなければいけないんです。

そうすると、学生からクレームが来た時に、(クレームは個々の先生に来るんじゃなくて、学部長、学科長に来るんです)学部長、学科長が対処する。だから、彼らが高い給料？もらっているのはその為なんです。(少数：笑い) 弁護士がわりのクレーム対策人ですよ。学部長、学科長のところへシラバスがガーッと保管されているわけ。で、授業についての問い合わせ(クレーム)が学部長・学科長へ来たら、「私のところに来ていたシラバスではこういうことを教えることになっています」とこう来るわけね。

クレームされた教員が出てきたら喧嘩になりますからね。教員が「勉強しないお宅の息子が悪いんですよ」こう言ったら喧嘩になります。だからワンクッション置いて、その上の学部長、学科長が出て行って、「それぞれそういうことで…ちゃんと授業シラバスどおりに授業は行っているはずですよ」とクレーム対応というわけです。こういうことで、授業シラバスはクレーム対応にも使用されてものすごく進んでいるんです。

日本はアメリカの影響を受けて文科省が“授業シラバス”が進んでおり、厳しくやっていますが、**“授業デザイン”はアメリカも日本も全然ダメ**。「文科省も先生方もなぜ解っていないんですかね」で、

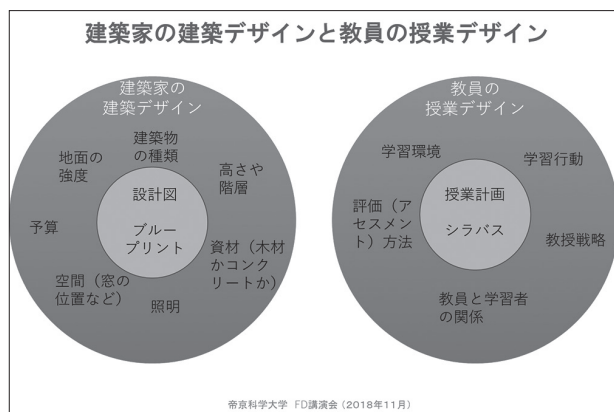
そういう質問をフィンク先生にしたら、「いやアメリカ人もそうだ、分かりにくいよね」ときた。

⑭ ブループリントとシラバス

じゃ、分かりやすいようにこれから建築家の作る“設計図（建築デザイン）”と大学の先生が作る“授業デザイン”、この2つを比較しながら教えましょう。これはイラストで示されていますね。

建築家の建築デザイン⇒設計図（ブループリント）
教員の授業デザイン⇒授業計画（シラバス）

- 1) フィンク博士は「主体的学び研究所」の筆者との対談で、建築家の建築デザインにもとづく設計図の譬えを用いて、授業設計とシラバスの違いについて説明している。（「主体的学び研究所」HPを参照）
- 2) われわれが目にするのは完成された「設計図」である。しかし、設計図になるまでに多くのことが考慮されている。
- 3) 建築家の場合は地面の強度、建築物の種類、高さや階層、予算、資材（木材かコンクリートか）、空間（窓の位置）、照明などを建築デザインして、設計図（ブループリント）に落とし込む。
- 4) 教員の場合は学習環境、学習行動、評価（アセスメント）方法、教授戦略などを授業デザインして、授業計画（シラバス）に落とし込む。
- 5) これをイラストで示すと次頁のようになる。



まず建築家の“建築デザイン”と教員の“授業デザイン”。これは私も結構考えて最近作ったんです。建築家の“建築デザイン”というのはまず、どういうデザインでお家を建てようかな、と考えるわけ。このデザインは①建築物のどういう種類なのか。そして、②高さはどうなのか。高層ビルなのか、一戸建てなのか、というのがありますね。で、③資材はどのようなを使うのか。コンクリートなのか、木材なのか。色々ありますね。④照明はどうするのか。こういう照明にするのか、色々ありますね。そして⑤空間、空間が大事ですよ。空間をどうするのか。それから、窓の位置をどうするのか。で、何よりもね、⑥予算を聞きますよね。“どの位の予算ですか”を聞かないとね。そして⑦地面、地震とか色々ありますから、この地面の強度という要素があります。“建築デザイン”はこういうのを考えるんです。

そして次に、この内容を“設計図に落とし込む”

んです。①～⑦のデザインは、建築士の提示する設計図の一部となります。これらのデザインをもとにお家を建てるんです。

じゃあ、“授業デザイン”とはどうなるのか。“建築デザイン”と対比して考えます。

教員の“授業デザイン”の内容を考えます。

要素としては、

①学習行動はようになって来るのか、アクティブラーニングをどのくらい導入するか。

②教授選択で反転授業を用いるのか、AIを用いるのか。ICTを用いるのか。

色々なことがありますよね。で、この辺り大事なことですよね。“TTポートリーナ研修”はここでいっぱい使うところです。

③教員と学習者の関係ですよ。

教員と学習者の関係ではどうなの？皆さん方、どういう関係を持っているの？対等ですか。どうですか。

⑮ 評価とアセスメント

ここです。大事なのは、④評価をどうするのか。先生方、ここでは“評価”という言葉は、忘れてください。これからは、ゲーリー先生の研修を受けた人は、みんな“アセスメント”という言葉を使います。“アセスメント”が全てですよ。評価は病院だったら、“良い病院or悪い病院”で“評価する”かも知れないけれど、みなさん“アセスメント”のことを“教育的評価”って言っているんですよ。だから先生方が学生を評価する時に、本当は“アセスメント”という言葉が大事なのです。

ところがね、日本では“評価”の英訳が2つあるんです。辞書では

(1) 評価：エバリュエーション

(2) 評価：アセスメント

とあるんです。

“アセスメント”は“評価”と訳されるんですね。皆さんこれ、疑問を持ったことない？“アセスメント”は“評価”と同じだったら、“アセスメント”という言葉、ないはずですよ。でもあるわけです。あるといことは、アセスメントとエバリュエーション、違うということです。では、“アセスメントって一体何なんなの？”“評価って一体何なの？”考えたことがあります？皆さん方、学生に“評価”出していますけど、それは“アセスメント的評価”ですか、それとも“評価的評価”ですか。

評価というのは、わかりやすく言えば、うちの奥様が教えてくれましたが、“外科医”ですよ。問答

無用でバサッと切っちゃうんですよ。もう、悪いところは“ばさっ”と切る。でもね、アセスメントは“看護師”なんだ。「これで大丈夫かな。もっとこうしたらいいんじゃないかな」ってじっくり考える。どっちかっていうと“アセスメント”がいいですね。

で、“アセスメント”って本当は何なの？一番いい方法は、今日帰ったらですね、英語の辞書を引いてください。但し1万円以下の辞書はダメ。1万円以上する高度な辞書を引いてください。なぜ、高度な高価な辞書が良いのか。高価な辞書ほどラテン、ギリシャ語の原典語が記入されているんです。で、“アセス”という言葉・接頭語が必ず出てくるんです。

“アセスメント”の“アセス”という言葉は、“膝を交えて話し合う”というのが語源のアセスなんです。ね、だから話し合いながら、改善、向上、改善に繋げる。所謂“アセスメント”というのは次の評価に繋がるということです。ね、“評価”は次に繋がらないんです。ただの“評価”は次の喧嘩に繋がれるけれども、次の評価には繋がらない。評価一本です。だから、学生に指導する時でも、何が問題だったのかということを経験を交えて話してあげると、次の評価に繋がるわけです。わかります？こういうことが教育的配慮という風に思えます。

続いて⑤環境はどうなのか。ね、環境は大事ですよ。私は今、八王子キャンパスのソラティアスクエアの一番良い414という最高の部屋を使わせてもらっているので、環境は良いです。あんなところに来たらもう絶対学生は勉強しますよね。しかし、地下に入れられて暗いところだとあんまり勉強したいという雰囲気はないでしょ。

環境は大事だと思います？部屋のライトとか。こういうことを色々考えて、こういう環境面でも本当は先生が決めなければいけないんです。

先生方、教室のことなんか考えてないでしょ。教務に全部任せているでしょ。「考えを言っても、教務は聞いてくれない？」それもあるけど、諦めちゃいかんですよ。

やっぱりこういう環境の面も考えて、熟考して“授業シラバス”を作るんです。先生方が書かないといけな“授業シラバス”の中には、こういう諸々のものがいっぱいあるということを知って欲しいのです。

⑩ 氷山の一角

先生が「そのアクティブラーニングを使いたい」

と授業シラバスで言っているんでしょ。先生のアクティブラーニングはどこで使いたいの？

- ・学習行動で使いたいの？
- ・授業選択で使いたいの？
- ・教員と学生関係でアクティブラーニングを使いたいの？
- ・評価のためにアクティブラーニングを使いたいの？

同じアクティブラーニングでも色々なものがあるわけですよ。ですから、授業シラバスにしても建設デザインにしても、やはり目に見えるアクティブラーニングは授業シラバスに書いてあるだけで、氷山の一角となるわけです。授業デザインと目に見えていないアクティブラーニングが奥深くにあって、その一部が見えている、授業シラバスに書いてあるということに過ぎないということです。

授業デザインと授業計画（シラバス）の関係



帝京科学大学 FID講演会 (2018年11月)

“授業デザイン”っていうのが物凄くアメリカではね、重要になった時期がありまして、あの時はいつでしたか？皆さん1978年、1978年っていうと何ですか。はい、ちゃんと聞いていましたか？「ゲーリー先生の“授業”」（一同：笑い）。1978年は、1995年よりも前ということ…。つまり、“教育中心・教育パラダイム”だったんです。だから先生が全部牛耳っていたんです。だから“どういう授業”をするかということがこの時代に必要だったので、もう3ヶ月前からこういう“授業デザイン”をやっていた。そして、“授業シラバス”は最初の授業の2週間前に完成していればよかった。良い時代でした。

だから今はこんな直前準備はできないと思いますよ。今はもうこんなのを準備したって、さっきのYouTubeみたいなやつちゃうから、できない。

でもこれは1978年、これがベストセラー、未だに売れているんですけれども“Teaching Tips”、これを、元にしたのが名古屋大学の「成長するティッ

すって」と言ったけど、まあ、皆さんね、大学は偉いんだから。ダメ。と言って私は“仕方なく”この修める学修にしたのだけれども、本当は“習う”学習なんですよ。

この“修”か“習”について最も詳しい人はゲーリー先生ですよ。そのことについて、私の玉川大学の本の中で、“単位制が1949年にアメリカから導入されて日本に初めて来た時に単位に基づいた学習”というのはこの修める“学修”を使ったんです。なので、私はこの本を書く時に、学修、修める修と書いたら、玉川大学からことごとく“習う”に直されたんです。「違うんだ」と言ったのに。「ゲーリー先生、それはおかしいのではないですか。日本語的に」と言われた。“貴方がおかしいのだ”と言ってゐるんですが、で、この“学修”というのは、実はこの単位に基づいた内容を修めるなんです。単位を修めるから学修です。学習が単位に繋がっていなかったら、習うにしなければいけない。ところがうちの学修・研究支援センターは、支援センターに来た人が単位をもらうわけではないですよ。広く学んでいるわけですから“習う学習”じゃないかな。ね、帝京科学はどうですか。

だから、幅広く“習う学習”か、単位を“修める学修”かというのは、そういう違いがあるということをやはり知っておかないと、おかしいことになるから。

⑩ 専門教育とアクティブラーニング

今回の講演内容を加藤先生とお話ししながらですね、なかなかその、うまく専門知識とアクティブラーニングと両立できないという、アクティブラーニングは素晴らしいのだけど、アクティブラーニングだけやっていて、本当に専門知識を授けることができるのかどうか。特に看護系とかそれも専門職の大学、特に医療系では国家試験というのがあるんですよ。国家試験がないような教育現場に行きたいですよ。でも、そうはいかん。

それから皆さんね、実は看護系とか医療系だけじゃなくて、いま日本の文系も問題になっているんです。文系が一番問題。学生に目標がなく、野放しだから。

最近は文系でも卒業試験を入れてくるんです。これからどうします？卒業試験が入ってきたら大変ですよ。4年間レジャーランドなんて、そういうことは言えない。

専門知識をアクティブラーニングでどうするかと言う、これが大きな課題。で、私の提案は、専門知

専門知識の習得とアクティブラーニングの両立

- 1) 両立は可能である。具体的には、独自の反転授業を開発することを提案したい。
- 2) すなわち、理論や専門知識の習得はICTを活用して教室外学習で行うという提案である。以下に事例を紹介する。これは前回も紹介した。
- 3) まず、収録した映像をLMS（Learning Management System学習管理運営システムの略）にアップしておけば、必要に応じていつでも視聴でき、専門知識の習得を教室外でできる。
- 4) 教員は収録映像の中から、とくに重要と思われるテーマを絞り、教室内でアクティブラーニングにつなげることができる。まさしく、「一石二鳥」である。

帝京科学大学「FD講演会（2018年11月）」

識は、ICT。要はこれからAIに任せる。そして、アクティブラーニングを先生がやったらどうかという考えなんです。

極力そう言うものをICTでやって、先生は、本当に教室の中でアクティブラーニングができれば一石二鳥ではないかって言うことで、LMSというものが、ここにも入っていると思いますけれども、LMSを使ったものをやったらどうか。

このことについて事例を示します。この事例の復習講義が毎週水曜日にあり、この復習講義が終わったら水曜日は疲れるんです。うちの奥様が「貴方、今日疲れているわね、ごめんなさい。今日は水曜日だったわね」こうなるのよ。水曜日めっちゃくちゃ疲れる。心底疲れる。なぜ疲れるか。私は授業をしていないからなんです。授業を教えていないとね、ことごとく疲れるんです。なぜ疲れるのか、それは後から出てきます。

⑨ 反転授業とフィードバック：事例を踏まえて

事例

- 1) 私は、メディアサイト社のマイメディアサイト映像収録システムを活用している。次頁の映画『モナリザスマイル』活用して反転授業を行うことも可能である。
- 2) 次々頁のスライドは、読売新聞社松本美奈氏によるフィードバック映像である。
- 3) これは、八王子キャンパス1年生の授業「一般教養セミナーⅡ」（初年次教育）の今週水曜日（7日）の授業後のフィードバックの実例である。
- 3) 来週水曜日にフィードバック視聴確認試験があり、それをアクティブラーニングにつなげる。教室内授業と教室外学習が循環している。

帝京科学大学「FD講演会（2018年11月）」

いま私の授業で読売新聞の社長室にいるTOPの記者、松本美奈さんをお手伝いとして招いて3年間教えてもらっています。彼女が全部授業をやるんです。私は彼女の授業後に「さようなら」言うだけです。でも、どうしても疲れるんですけど、すごく充実しているんです。彼女がもの凄く“良い授業”をするんです。今日は皆さん方にね、面白い授業内

容を紹介しますが、今週の水曜日7日の授業と授業の後、どうしているかという事例の内容、パワーポイントを入れたVTRを見てもらいます。



この授業ちょっと説明しますと、授業そのものが全部1週間繋がっているんです。

まず、(1) 事前に新聞を読んでもくる前提の授業があります。あるいは授業が終わって新聞を読むこともあります。とにかく授業があり (2) 学生は授業後にリフレクションシートを書きます。その (3) リフレクションシートを彼女が約1時間位で全員分添削する。新聞記者ですから、すごいですよ。新聞記者は見るのが早くて。パパパパーっと赤字を入れて、私は「やるな〜！」って言っているんです。彼女は「先生、仕事ですからね、目つぶっておいてください」と言うけど、早く“パーッ”と赤字を入れて、“松本美奈”とサイン入れて (4) 翌週返却するんです。で、翌週の講義の冒頭、そのリフレクションシートの内容と傾向を踏まえて (5) 「先週の授業はこうでしたね。…で、リフレクションは…。良かった点、悪かった点…」と言ってフィードバックエイドを作るんです。このフィードバック映像を私も聞くわけです。見るわけですよ。学生と同じものを。 (6) 私はそれからフィードバックエイドの内容でスクラッチクイズを作るわけです。今日やったようなスクラッチクイズを私が作って、松本美奈先生の授業後にスクラッチクイズを授業後半にやります。全部教室中を廻っているんです。だから、非常に学生はもう暇がない。教室内授業（授業内容とその復習：スクラッチ）と、教室外学習（リフレクションシートの赤字添削：講義内容の理解度）が循環している。

この循環授業は私が、皆さんから講演依頼が来る

前から私がやっていた初年次教育の一般教養セミナー。モナリザスマイルという名の教養セミナーなのです。

このような内容を収録したDVDを、私は大学に買わせて。大学はね、面白いんですよ。ここもそうかもしれませんが、規定としては「いくらでも買ってあげる」と言うんです。でも「DVDはダメだ」と言うんです。「DVDは1本に限る」って。しかし、私は研究所として7本買っておけたんですよ。それは同じタイトルではなかったから。これを見て授業に臨んで。モナリザスマイルでDVD7つ分の内容を提供しているんです。これは、良い教材ですよ。是非皆さん方もね、使ってください。で、これは私の過去のやつですね。この内容は2016年の話です。

先ほどの松本美奈先生の授業 (1)～(6) は一昨日の話です。あしからず。先ほどの話、授業が終わった後、フィードバックエイドを行います。一昨日の水曜日は6分間だったんで、ちょっと見てもらったら良いかな。では“松本美奈先生のフィードバック：振り返りシートDVD”内容を見てください。

<DVDの再生：すべて松本美奈先生の講義内容>

はい、皆さんこんにちは。この新聞記事に関する授業と振り返りは、楽しい授業でしたか？

では今日のポイント。3つのフィードバックと“おまけ”のまとめをします。

(1) まず1つ目。足で書く。

今週のインタビューは大変でしたね。徴用工問題。大人でもてこずるような政治的、非常に繊細な問題に、よくぞここまで踏み込みましたね。新聞を読み、コンセプトマップを書き、その蓄積の上のインタビューでした。だから、上手いき、だから、後悔も起こったんです。私たち新聞記者は、足で書く。原稿は足で書くと言うことを、ずっと叩き込まれてきました。ゲーリー先生も同じことを大学の研究者として言われてきたそうです。論文は足で書く。百聞は一見に如かず。皆さんの目の前にある新聞、そして教科書、すべての本。これを疑え。疑うためにはどうしたら良いか。まず、自分で現実を見ることです。でもその現実が本当かどうか、100取材して99捨てる。その時に残った1が本当であるかどうか、それを検証する。

(2) では、どうやったら検証してわかるでしょうか。それが“俯瞰”です。

俯瞰するんです。目の前のことが全てではない。新聞を疑う、それと同時に、目の前にあることも疑わなくてははいけません。この信憑性はどこで、見分けることができるか。そこでモノを言うのが、知識を元にして自分の頭を使えということです。

俯瞰しましょう。遠くが見える高いところへ。自分が鳥になったと思って、高く飛び上がってください。このソラティオスクエアよりももっと高いところに上がって、そこから今の自分を見てください。

さあ、あなたの目の前にあることは、どう見えますか？100取材して99捨てる。このためにはたくさんの知識と経験が要ります。そこから、優先順位を弾き出す。そのためにも俯瞰してください。全体を見渡すためのものを蓄積してください。手の中にあるものだけで議論しようとする、それだけで論文を書こうとする、必ずつまらないものになります。

数少ないこのようなデータの議論だったら、おそらく井戸端会議になりますね。なんの俯瞰にもなりません。だから蓄積なんです。先程言いました、足で書くためにも蓄積。俯瞰するためにも蓄積。全てが蓄積なんです。しかし、なんでも貯めてはダメ。いつもなんでも貯めておいてはダメ。いつも蓄積と目の前にあることを往還してください。往還して調べてください。

(3) そしていつも表現する、その上で最終的には表現しましょう。

表現しなければ伝わりません。沈黙して、黙っていて、相手に「察してよ」と言うのも良くないのです。伝わりません。だから、伝えます。

そのために皆さんにもちゃんと考えて貰いたい。今日、授業の時に申しあげましたね、社説にあって、皆さんの文章にないものは何か。社説になくて、自分の文章にあるものは何か。

何人かの人たちは語彙力、構成力等のことを出してくれました。そして今日のリフレクションシートの特徴は、みんな段落がちゃんとつけられていた。でも最初はみんな、段落をどうやってつけたら良いのかわからないと書いていた。

段落、どうやってつけるのでしょうか？それも来週補講に出る人は特に予習してくださいね。

予習もそう、補講もそうですが、「何か教えてください」と、口をパクッと開けて出てくるのはやめてね。あなた自身が学ぶんだったら、あなた自身が私に反論するだけの予習をしてもらっちゃい。私は、受けて立ちます。

(4) 最後に“おまけ”です。“観察、統合、表現と振り返り”。これを全て往還しながら、“言いたいこと”を伝えていきます。

では、今日やったところまでをお渡ししますよ。

“観察”の中には分析があります。対象物を分析し、分解し、比較する。こういったものが観察する際に働いています。“統合”する際には構成が必要ですね。構成上、仮説を立てることに論理性も必要です。また、構成する際に内容を整理しなくてははいけませんね。“表現”には文法も必要です。適当に並べていてはなかなか文章にならない。だから、誰に伝えるのか、伝える相手の文化的な背景や言語を理解し、反映することが必要です。こう言った往還のベースにあるのは知識の研究です。勿論ここに書いてあるのは一例に過ぎません。

皆さんは、ここにある空白に何を埋めていくのでしょうか。“観察、統合、表現と振り返り”。ここに自分の言葉に沢山のものを入れてみてください。その先にあるのが“伝える”。伝えた先にもう一つあるのが、“振り返り”です。これ、言ったら言ったきり、ではない。返ったら返ったで、おしまいではありません。

いつも、いつも往還してください。そこに初めて新しいものとの出会い。そしてまたそれが新たな学びになり、もっともっと、素敵な人になれるチャンスが待っています。では来週。またお目にかかりましょう。今日はありがとう。

<DVD再生終了>

(ゲーリー先生の話)

私はあの、テレビカメラで映してあるやつで、毎週「松本美奈講義と復習授業」これをやっているんですよ。

ただね、先生方、こんな授業はできないですよ。できると思わないでください。これはできなくて当

たり前。なぜかと言うと、これ実験のクラスです。で、如何にすれば学生が伸びるかという実験授業です。だから、教室（授業）そのものを実験で扱っているんです。だから、これは理想的ですけども、こう言う風にやれないだろうかと言うね、そういう問題提起もしているわけですね。

この松本美奈授業、学生達は、授業のベースに新聞記事がありますから、読売新聞の朝刊と夕刊を学期中全部自宅で採らせるのです。で、最初はね、学生は「先生、読売新聞高いのに、買うのですか」で、「授業辞めます」って、バラバラ辞めていったんですよ。で、残った学生が何人かいました。「高くてもいいから一流の新聞記者から学んだら、就活にも役立つだろう」と思ったらしく、残った学生が十数名いたのです。

だから、「君たちが残ったから言うけど、新聞購読料は払う必要はありません。ゲーリー先生のポケットマネーから払います。ウソ。大学が払ってあげます」と、こういうことです。すごいでしょ。大学が払ったんです。でも大学が購読料、だってすごいお金ですよ。あれひと月3,700円位するんじゃない。それを3ヶ月、4ヶ月あるわけですよ。

でも、これを最初からね、「購読料は全員分大学が払う」って言ったら、来て欲しくない学生がいっぱいくるわけです。でも私が「購読料高いよ〜」って言ったら、「わわわわ」って言って出てしまっ、静かになったところで、深呼吸して「実は…」、とこう言うわけですよ。

本当にこういう授業やりたい学生が取っているわけです。だからみんな、勿論水曜日は自宅から新聞持ってきますよ。それがこの授業の大きなポイントの1つですね。授業は15分前に始まるんです。だから、10時45分からの授業ですけども、10時半にはもう学生が来て、ホワイトボードに新聞記事のまとめレポートをバーンと書いている。

皆さんね、1年生ですからね。ゼミの学生ではないんです。1年生ですよ。もうグループでホワイトボードに書いている。事前レポートだけでなく、授業が終わってからも30分残って議論する。だけどお昼の前の時間だから、食い込んでも大丈夫ですよ。この“時間的授業デザイン”も大事。

このランチタイム議論は、今日のDVDで美奈先生が“補講”と言っていたけど、“補講”じゃないんですよ。“エクストラ”なんですよ。だから普通の“居残って”やるだけです。でも、いま、彼らは一生懸命に“ポートフォリオのコンセプトマップの書

き方”とかも平行して学習やっているから、時間が足りなくて、文章を書く時間がないんですよ。だから、美奈さんが「来週から本当に文章を書きたい学生だけ残って指導します」って。いま全体の4分の1くらいですけどね。残って来ているわけですよ。

そういう人たちが、今後どうやってどう変わるのかという実験的なものをやっているから、みなさんにできる事ではないんだけど、それだけやった手作りの授業をしてあげれば、伸びるんじゃないかと思うんですが。もう、実は本当に手応えがあるんですよ。私もね、びっくりするくらい。

たとえばいままで、リフレクションシートっていうのがあって、学生に授業終わってから15分間くらいで授業の内容を書かせていたんですが、1行か2行位しか書けないですよ。

いまは、私がシートいっぱい書かないと受け取らないから。ビシーっを書いてきますよ。本当、先生方に見せてあげたかったくらいですけど、ビチーっを書いてきますよ。ちょっとでもシートに空白を作ってきたら、美奈先生が「この3分の1はどこに行ったんですか？」って書いてくるからね。みんなびっしり書くんですよ。書くことによって、段落もちゃんとつけられるようになるし、もう本当にね、すごいの。

勿論この授業はあの新聞記事と内容を教材にしているから、徴用工とかそういう政治的な問題も扱うし、しかも徴用工の問題は帝京に来ている韓国人留学生に突撃インタビューしたんですよ。すごいでしょ。で、「美奈先生、ちょっと行き過ぎかな？大丈夫かな？学生は消化不良にならないかな？でも、まあやってみなきゃ」と静観してたら、ちゃんとやってきて。ある学生は、「韓国の留学生にインタビューしたけど、言っていることがわからない」と、韓国の新聞を持ってきて、「留学生はこの新聞のいうことを引用してなんか言っていたから、韓国の新聞を取り寄せてインタビューやりたい」って言うのです。彼らもやろうと思ったらちゃんとやれるようになる。

で、美奈さんと3年前からこの授業をやっているんです。これは私の、集大成じゃないけど、理想的な授業です。私は、大学の先生と社会人がペアを組んで授業をするべきと思います。

私は15回全部やっていますけど、でも松本美奈さんは、非常勤講師ではないから講師料なんか貰わないんですよ。もうほとんどボランティアみたいな

ものです。私は、給料を貰っていますけどね。こういう状況ですけど、私は常々、大学の先生と社会人がペアになって授業をやれば、もっと学生が生の社会状況が体験できるんじゃないかと。

実は、中小企業の社長さんが60名くらい学期中に来るんですよ。リクルートするわけでもなんでもなく、(もう内定しているかもしれないけれども)全部学生と一緒に授業を受ける企画を組むんです。そういう事によって社長さんに「いま、学生にどういう授業が行われているか」ということを実感してもらいたいという、そういう実験的な事をやっています。これも授業やった後で学生と一緒にグループを作り、授業内容でスクラッチクイズをやる。今日、先生方にもやった5問中3問が選択肢ABCD全部正解なんです。

⑩ ICT = (イコール) 授業デザイン

という事で“授業はずーっと繋がっている”という事です。アクティブラーニングというのは、繋がっているからこそ学生に持続的な学習を施せる。こういう風に、デザインしながら、そして、こういう学習環境を作りながら進める。じゃあ、アクティブラーニングが本当に機能しているかどうかの評価(アセスメント)は、私の本のタイトルではないですけれども、それが社会に通用するか否か。持続性があるかどうか。という事ですよね。

おわりに～ICT=授業デザイン～

- 1) 本日のテーマは「アクティブラーニングを促す授業デザイン」であった。この授業デザインにICTを活用するかどうかを判断するのは教員であるが、それを専門的にコンサルティングするのがFDerの仕事である。
- 2) これからのICT普及には、教員の授業デザインを支援する専門家が必要である。すなわち、ICT=授業デザインという構図が生まれる。
- 3) ICT環境を提案するだけに留まらず、教員と一緒に授業デザインを支援していく、コラボレーションが強く求められる。
- 4) アクティブラーニングを促す授業デザインかどうかの「判断」は、それが社会で通用するか否か、あるいは持続可能なものかどうかで決まると言っても過言でない。次頁の拙著の表紙を参照。

帝京科学大学 FD講演会 (2018年11月)

一生懸命アクティブラーニングを使用した学習を学校で、あるいは大学で勉強してそして、社会に出ても、何も使えなかったら我々はなぜ勉強するんですか。

そういう事ですよね。皆さん方、一生懸命教えていたのは、社会に出てね、役立って欲しいと先生は思っている訳でしょ。先生の理想は何ですか。先生の理想は私の教えたことが、少しでも学生が社会に出て役立って欲しい、独り立ちした時何か役に立って欲しい。そう言う気持ちじゃないですかね。試験

が終わったら、全部忘れてしまったら、先生悲しいですよ、と思いませんか？



帝京科学大学 FD講演会 (2018年11月)

という事で、これが私の本の表紙なんですけども、知識偏重型、そういうものをやめて、もっとアクティブラーニングに行きましょう。というような時期がきているわけですよ。

7) 質問コーナー

〈1〉ティーチングパラダイムとラーニングパラダイムのバランスについて

(司会者 渡邊：先生方なにか質問がございましたら。)

(質問者A先生) ティーチングパラダイムとラーニングパラダイムについてお伺いします。これは、新旧ではなく両方必要なんではないですか。

(ゲーリー先生) お、はい。いいですよ。

(質問者A先生) 僕は理系。例えば実験とか、そうするとベースとなる知識とか基礎というのは横の関係。最初からそれは難しい。すると最初はティーチングスタイルがあって、ケーススタイルがあって、またティーチングスタイルという相互に移行するものではないのですか。

(ゲーリー先生) 上野原のキャンパスの方、いま素晴らしいね、質問が聞こえたかな。聞こえました？もう一回言ってもらいましょうか。とても大事なので、先生申し訳ない、向こうの人にも聞こえるように大きく。

(質問者A先生) 新旧の差異ではなくて、縦の

ティーチングスタイルも横のスタイルも両方必要なんじゃないかと僕は思うんですが、どうでしょうか。ということ聞いたんです。

（ゲーリー先生）素晴らしい。拍手はないんですか？拍手は。

（一同：拍手）

（ゲーリー先生）いやー、素晴らしいですよ。その通りです。その通りだけど、現実では2つに分けて今日はまだ縦のクラスです。今日は横のクラスということはできないから、一つの中でいま先生が言ったね、縦のクラスと横のクラスというのを考えられないかな、というのが新しいタイプですよ。だから分けてやるのは簡単だけど、それを一つの中で、例えば、アクティブラーニングと言うのをとります。

アクティブラーニングの中で、いま先生の言ったことができるかどうか。できると、最先端の中で、そういうその縦の関係の知識を授ける部分、そういうものと、それから、グループで活動する新しい学習ものとのコラボレーション的なものと、そういうのができないか、と言うことです。私、答えないですよ。

でも、そういうのを我々が探しているところなんです。だから、分けてやろうと言うのは一番簡単だし、分けると言うことは、さっきの旧制高校と旧制大学の話に戻っちゃうけど、求めているものではないのです。一緒にして何ができるか。一緒にしてなんぼということですよ。だから縦と横の融合を考えていくところに非常にポイントがある訳ですよ。

だから、この質問の内容はよくわかります。理に適った質問だと思うんですけども、答えは皆さん方が考えてもらう、と言うことですね。

〈2〉リフレクションシートについて

（司会者 渡邊：先生方、他にありましたら。）

（ゲーリー先生）はい、どうぞ。

（質問者B先生）貴重なご講演をありがとうございました。何点かあるんですけども、まず、リフレクションシートについてちょっとお伺いしたいのですが、先ほどの講義の話でわかりましたが、いっぱい埋めて、埋めないといけないと聞いたと言うことだったと思うんですけども、具体的にその学生がそのアクティブラーニングの中で学習した内容について振り返ることなのか、学習過程を振り返ると言うことについて書いているのか、どちらを内容と

して、学生に書いてもらっているのかと言うことをちょっとお伺いしたいんですけども。

（ゲーリー先生）はい。1つずつ行きましょうかね。

いい授業というのはたくさん仕掛けがあるという事ですよ。ただ、リフレクションシートを書きなさい。ではなくて、リフレクションシートを書くための工程図というのがあるわけです。これは、A4やA3というのですが。大きなものがあって、今日の授業の達成目標というのがあるわけです。で、何を達成したかっていうのを15回、線があってそこで書くんですよ。「自分で今日授業に臨むところは、こういうところで、授業始まる前に、工程表の今日の到達目標を自分で書いてください」と言って書かせる。「最後にどこまで達成したか。自分で振り返って書いてください」と言って書かせる。そして、リフレクションシートには「具体的に、どういう風に振り返ったのか」というのが書き易くなっている。

だから、授業前後の頭の中では、「リフレクションシートを書く」という、習慣と概念がもうできているんですね。それはもう、毎回15回書いてあるから。その工程表というのがある、その工程表に学生がそれぞれ入れていく。

学生。私もそう思うくらいきつい授業ですよ。で、もっと凄いのはいアレビューしますよね。交換するでしょ。そして相手のものを自分がそれになりきって質問するわけです。相手のものと交換するんですよ。「あなたは、リフレクションシートにこう書いているけど、ここのところは、よくわからない」というような質問をする。で、この質問が非常に難しいんですよ。言葉でやるから。

で、いま、コンセプトマップという話が出てきましたよね。新聞をタダで配っているわけじゃない。勉強するために配っているわけですよ。必ず1日1回は新聞の自分が一番気に入った新聞を切り抜くんですよ。記事を切り抜いてそれを、A4のリフレクションシートみたいなものがあって、その裏に糊づけで、両面テープで付けて、その記事からキーワードを選んで、それでキーワードからコンセプトマップを裏面に書くんですよ。でも学生はやっている。感心しますね。

－終了－

編集後記

土持ゲーリー法一先生の講演（2018年11月9日 帝京科学大学千住キャンパス）は、途中休憩を取らざるを得ないほどの長丁場でしたが、当日あっという間に終わってしまったほど、人をひきつける内容と話術（「術中にはまる」とはこういうことか。）には感服させられました。そして、何か我々に必要とするもの、考察しなくてはいけないもの、いつか忘れてきた教育的情熱…。このことを十分に思い知らされた講演と演習内容で、それを教職員が自分のものにすることができれば、この講演記録集の価値は高いものになるはずです。

また、この講演会開催をお認め頂いた沖永莊八学長先生、FD委員会委員長の永沼充先生、紀要による掲載を快くお認め頂いた総合教育センター長内藤可夫先生に厚く御礼申し上げます。この講演会、また記録集はFD委員会教員資質向上ワーキンググループ下記の各先生のご協力にて行うことができました。厚く御礼申し上げます。

FD委員会 教員資質向上ワーキンググループ

- ・医療科学部看護学科 泉キヨ子 先生
- ・生命環境学部生命科学科 柴田安司 先生
- ・医療科学部作業療法学科 長谷川辰男 先生
- ・医療科学部医療福祉学科 加藤洋子 先生
- ・教育人間科学部こども学科 吉川和幸 先生
- ・生命環境学部生命科学科 山口十四文 先生